

つゆのあとさき

永井荷風

青空文庫

女じよきゆう給きみえの君江は午後三時からその日は銀座通のカツフェーへ出ればよいので、市ヶ谷いちげや本村町ほんむらちようの貸間からぶらぶら堀端ほりばたを歩み見附外みつけそとから乗った乗合自動車ひびやを日比谷で下りた。そして鉄道線路のガードを前にして、場末の町へでも行つたような飲食店の旗ばかりが目につく横町よこちようへ曲り、貸事務所の硝子窓ガラスまどに周易しゆうえき判断金亀堂きんきどうという金文字を掲げた売卜者うらないしやをたずねた。

去年の暮あたりから、君江は再三気味のわるい事に出遇であつていたからである。同じカツフェーの女給二、三人と歌舞伎座かぶきざへ行つた帰り、シールのコートから揃そろいの大島の羽織ほんべと小袖こそでから長襦袢ながじゆばんまで通して袂たもとの先を切られたのが始まりで、その次には真珠しんじゆい入り本ほんべ籠甲つこうのさし櫛ぐしをどこで抜かれたのか、知らぬ間に抜かれていたことがある。掏摸すりの仕業しわざだと思えばそれまでの事であるが、またどうやら意趣いしゆある者の悪戯いたずらではないかという気がしたのは、その後猫ねこの子の死んだのが貸間の押入おしりに投入ごれてあつた事である。君江はこ

の年月随分みだらな生活はして来たものの、しかしそれほど人から怨うらみを受けるような悪いことをした覚えは、どう考えて見てもない。初めは唯ただ不思議だとばかり、さして気にも留めなかつたが、ついこの頃、『街巷新聞』といつて、重おもに銀座辺の飲食店やカツプフェーの女うわさの噂をかく余り性の好くない小新聞こしんぶんに、君江が今こんにち日まで誰も知ろうはずがないと思つていた事が出ていたので、どうやら急に気味がわるくなって、人に勧められるがまま、まずトうらない占うらをみてもらおうと思つたのである。

『街巷新聞』に出ていた記事は誹ひぼう謗ぼうでも中傷でもない。むしろ君江の容姿をほめたたえた当り触さわりのない記事であるが、その中に君江さんの内うち腿ももには子供の時から黒子ほくろが一つあつた。これは成長してから浮気家業をするしるしだそうだが、果してその通り、女給さんになつてから黒子はいつの間にか増ふえて三つになつたので、君江さんは後援者が三人できるのだらうと、内心喜んだり氣を揉もんだりしているという事が書いてあつた。君江はこれを読んだ時、何だか薄気味のわるい、誠にいやな心持がした。左の内腿うちももに初めは一つであつた黒子がいつとなく並んで三つになつたのは決して虚誕うそでない。全くの事実である。自分でそれと心づいたのは去年の春上野池いけの端はたのカツプフェーに始めて女給になつてから、暫しばらくして後銀座へ移つたところである。それを知っているのはまだ女給にならない前から今も

つて関係の絶えない松崎という好色の老人と、上野のカツフェー以来とやかく人の噂に上る清岡進という文学者と、まずこの二人しかないはずである。黒子のある場所が他とはちがつて親兄弟でも知ろうはずがない。風呂屋の番頭とてそこまでは気がつくまい。黒子の有無は別にどうでもよい事であるが、風呂屋の番頭さえ気のつかない事を、どうして新聞記者が知っていたのだろう。君江はこの不審と、去年からの疑惑とを思合せて、これから先どんな事が起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心は勿論、お御籤一本引いたことのない身ながら、突然占いを見てもらう気になつたのである。

アパートメントの一室を店にしている新時代の売卜者は年の頃四十前後、口髭を刈り洋服を着、鼈甲のロイド眼鏡をかけ、デスクに凭れて客に応対する様子は見たところ医者か弁護士と変りはない。省線電車の往復するのが能く見える硝子窓の上には「天佑平八郎書」とした額を掲げ、壁には日本と世界の地図とを貼り、机の傍の本箱には棚を殊にして洋書と帙入の和本とが並べてある。

君江は薄地の肩掛を取つて手に持ったまま、指示された椅子に腰をかけると、洋装の売卜者はデスクの上によみかけの書物を閉じ廻転椅子のままぐるりとこちらへ向直つて、「御縁談ですか。それとも大体にお身の上の吉凶を見ましようか。」とわざとらしく

笑顔をつくる。君江は伏目ふしめになって、

「別に縁談というわけでも御在ごいざいません。」

「では、まず大体の事から拝見しましょう。」と易者はあたかも婦人科の医者いしやが患者の容態をきくように、なりたけ気がねをさせまいと苦心するらしい碎けた言葉づかいになり、

「占いも見つけると面白いものと見えまして、いろいろなお客様きやくさまがお出いでになります。毎朝会社のお出かけにお寄りになって、その日その日の吉凶を見る方かたもあります。しかしむかしから当るも八卦はっけ、当らぬも八卦という事がありますから、凶の卦けに当たってもあまりお気におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつでいらつしやいます。」

「丁度で御在ごいざいます。」

「それでは子の年ねとしでいらつしやいますな。それからお生れになったのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さようですか。」と易者はすぐに筮せいちく竹とを把とって口の中で何か呟つぶやきながらデスクの上に算木さんぎを並べ、「お年廻まわりりは離りちゆうだん中断ちゆうだんの卦けに当ります。しかし文字通り易の積義せきぎを申上げてまわりも廻まわり遠とほくて要領ようりやうを得ない事になりましょうから、わたくしの思おもいついた事だけを手短てみじかに申上げて見ましよう。大体を申上げると、この離中断りちゆうだんの卦けに当る方は男女

に限らず親兄弟にはなれ友達も至つて少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになった月日から見ますと、遊魂ゆうこん巽風せんふうの卦に当ります。これは一時お身の上に変つた事が起つても、その変つた事が追々おおい元の形に立戻るといふ卦であります。この卦から考えて見ますと、現在のお身の上は一時変つた事の起つた後、追々もとのようになつて行こうという間のように思われます。天氣に譬たとえて申上げれば暴風のあつた後、その名残りがなかなか静まらない。しかし追々しずか静になつて、やがてもとの天氣になろうといふその途中だと申したらよいでしょう。」

君江は膝ひざの上に肩掛もてあそを弄びながらぼんやり易者の顔を見ていたが、その判断は全くその身に覚えがない事ではない。どこか当っている処があるので、何となく気まりのわるいような心持で再び伏目になつた。一時身の上に変つた事があつたと言ふのは、大方おおかた両親の意見をきかず家を飛出し、東京へ来て、とうとう女給になつた事だろうと思つたのである。

君江が家を出たわけは両親はじめ親類じゆゑぞ中挙つて是非にもと説き勧めた縁談を避けようがためであつた。君江の生れた家は上野停車場ていしやばから二時間ばかりで行かれる埼玉県下の丸田町にあつて、その土地の名物になつてゐる菓子をつくる店である。君江は小学校の友達の中で、一時牛込うしごめの芸者げいしやになり、一年たつたたぬ中身受うちみうけをされて、人の妾めかけになつて

いた京子という女と絶えず往来ゆききをしていたので、田舎者の女房などになる気はなく、家を逃げ出してそのまま京子の家に厄介になった。田舎から迎いの人が来て、二、三度連れ戻されてもまたすぐ飛出す始末。親たちも困りぬいて、君江の我儘わがままを通させ銀行か会社の事務員になる事を許した。

君江は京子の旦那になつて川島という人の世話で、間もなく或保険会社あるに雇われたものの、これは一時実家へ対しての申訳もうしわけに過ぎないので、半年とはつづかず、その後はぶらぶら京子の家に遊んで日を暮している中、突然京子の旦那は会社の金を遣込つかいこんだ事が露見して検事局へ送られる。京子は芸者に出ていた頃のお客をそのまま妾しやうたく宅たくへ引込みきこ、それでも足りない時は知合いの待合まちあひや結婚媒介所を歩き廻つて、結句何不自由もなく日を送つているのを、傍そばで見ている君江もいつかこれをよい事にしてその仲間にはいった。しかし何分にもその筋の検挙がおそろしいので、京子はもとの芸者になろうと言出いひだす。君江もともども芸者はどんなものか一度はなつて見たいと思ひながら、鑑札を受ける時所轄の警察署から実家へ問合といあわせの手続をする規定のある事を知つて、やむことをえず女給になつた。

京子は田舎の家へ仕送りをしなければならぬ身であるが、君江はそんな必要がない。田

舎に育つただけそれほど流行はやりの物に身を飾る心もなければ、芝居や活動のような興行物も、人から誘われなにかぎり、自分から進んで見に行こうとはしない。小説だけは電車の中でも拾い読みをするほどであるが、その他ほかには自分でも何が好きだかわからないと言っている位で、結局貸間の代と髪結かみゆい銭せんさえあれば、強いて男から金など貰もらう必要がない。金などは貰わずに、随分男のいうままになってやった事もあるほどなので、君江は今までいかにほど淫恣いんしな生活をして来ても、人からさほど怨うらみを受けるようなはずはないと思ひ込んでゐる。占者の説明を待つて、

「それでは今のところ別にたいして心配するようなことはないんで御在ございますね。」

「御健康はいかがです。現在別に御おわるいところがないのなら、無論近い将来にもさして病難があるとは思われません。現在は唯ただいま今も申上げたように波瀾はらんのあつた後むしろ無事で、いくらか沈滞しんたいというような形もあります。御自分ではお氣がつかないでいらつしやるかも知れませんが、何か知ら不安で、おちつかないような氣がなさるのかも知れません。しかし易の卦では唯今申上げたように一時の変動が追々静まって行くのですから、これから先たいした事件が起ろうとは思われません。しかし何か御心配な事があつて、その事をどうしたらいいかと思召おぼしめすなら、その特別な事について、もう一度見直しましょう。そ

れで大抵お心当りがつくだろうと思います。」と易者は再び筮竹を取り上げた。

「実はすこし気にかかる事が御在まして。」と君江は言いかけたが、まさかに黒子の事は明らかさまには言出しにくいので、「自分には別に覚がないんですけれど、誰かわたくしの事を誤解している人がありはしないかと思うような事が御在ます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉じて再び筮竹を数え算木を置き直して、「なるほど。この卦は物に影の添う事を意味します。して見ると、何か御自分でいろいろ思いうすごしをなさるのですな。それがためない事もあるように思われて来ます。唯今の言葉で申すと幻影と実体ですな。物があつて影の生ずるのが自然でありますが、時と場合には、それとは反対に影から物の起ることもあります。それ故まず影をなくすようになされば、自然と物事は落つく処へ落ついて行くわけで。そういう御心持でいらつしやれば、別に御心配には及ばないと思います。」

君江は易者のいう事を至極尤だと思つたと、自分ながらつまらない事を気に掛けていたと、^{たちま}忽ち心丈夫な気になつてしまった。それでもまだ何やらきいて見たいような心持がしながら、しかしあまり微細な事まで問掛けて、それがため現在の職業はまだしもの事、二、三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つた事まで知られてはと、底気味のわるい心持も

する。猫の死骸や櫛くしのなくなつた事もきいて見ようとは心づきながら、カッフェーへ行く時間が気になるので、今日はこのまま立去ろうと考え、

「失礼ですが、御礼は。」といいながら帯の間へ手を入れる。

「壹いちえん円えんいただく事にしてありますが、いかほどでも思おぼしめ召よめして宜よろしいのです。」

出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけているすぐ側そばの椅子に坐つたのみならず、その一人はぎよろりとした眼付の、どうやら刑事かとも思われる様子に、君江は横を向いたまま椅子から立つて、易者にも挨拶あいさつせず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行はやりの衣いし裳しようの翻ひえるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、数寄屋橋すきやばしのたもとへ来かかると、朝日新聞社を始め、おちこちの高い屋根の上から広告の軽気球があがつているので、立留たちどまる気もなく立留たちどまつて空を見上げた時、後うしろから君江さんと呼びながら馳かけ寄る草履ぞうりの音。誰かと振返れば去年池いけの端はたのサロンラックで一緒に働いていた松子という年は二十一、二の女で。その時分にくらべると着物も姿もずっと好よくなっている。

君江は同じ経験からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「ええ。いいえ。」と松子は曖昧な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにいたのよ。それから遊んでいたの。だけれどまだどこかへ出たいと思って実はこれから五丁目のレーニンつていう酒場。君江さんも御存じでしょう。あの時分ラックにいた豊子さんがいるから、ちよつと様子を見て来ようと思つてゐるの。」

「そう。あなた、アルプスにいたの。ちつとも知らなかったわ。わたしはあれからずっとドンフワンにゐるわ。」

「この春だったか、アルプスでお客様から聞いたことがあつたわ。お逢いしたいと思つてもつい時間がないでしょう。あの、先生もお変りがなくなつて。」

君江は小説家清岡進の事にちがいないとは思いつながら、数の多いお客の中には、弁護士の先生もあれば、医者先生もあるの、それとなく念を押すに若くはないと、「ええ。この頃は新聞の外に映画や何かで大変おいそがしいようだわ。」

松子はこれを何と思いちがひしたのか、「アラ、そう。」といかにも感に打たれたらしく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わたしもいい経験をしたのよ。だから今度は大に発展してやろうと思つてるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、数の知れた男の事を大層らしく経験だの何だのと言うにも及ぶまいと、可笑おかしくなつて来て、からかい半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子さんがあるし、わたし見たような女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町おわりちようへ近くなるに従つて次第に賑かにぎやになる。それにもかかわらず松子は正直な女と見えて、忽激たちまちした調子になり、「だって、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛したためだつていう評判よ。そうじゃないの。」

君江はあたりを憚はばからぬ松子の声に辟易へきえきして、「松子さん。その中うちゆっくり会つて話しましょうよ。何なら、ちよつとお寄んなさいな。ドンフワンでも募集しているから紹介してもいいわ。」

「あすこは今幾いくたり人いて。」

「六十人で、三十人ずつ二組になつているのよ。掃除はテーブルも何も彼かも男の人がするから、それだけ他わきよりも楽だわ。」

「一日に幾番くらい持てるの。」

「そうねえ。この頃じゃ三ツ持てればいい方だわ。」

「それで、綺羅きらを張つたら、かつかつねえ。自動車だつて一度乗ると、つい毎晩になつてしまふし……。」

君江はこまこましました世智せち辛からいはなしが出ると、他人の事でもすぐに面倒でたまらなくなると。それにまた、金なんぞはだまつても無理やりに男の方から置いて行くものと思つているので、人ひと込こみの中に隔てられたまま松子の方には見向きもせず、日の光に照付てりつけられた三越みつこしの建物を眩まぶしそうに見上げながら、すたすた四よつ辻つじを向側へと横ぎつてしまつたが、少しは氣の毒にもなつて、後を振返つて見ると、松子は以前の処に立止つたまま、挨拶あいさつのしるしに遠くからちよつと腰をかがめ、それでもう安心したという風で、これも忽ち人通りの中に姿を没した。

二

松屋呉服店から二、三軒京橋きょうばしの方へ寄つたところに、表附おもてつきは四間間口の中央に

弧形ゆみなりの広い出入口を設け、その周囲にDONJUANという西洋文字を裸体の女が相寄
 っつて捧げている漆喰しつくいぎく細工。夜になると、この字に赤い電気がつく。これが君江の通勤し
 ているカツフェーであるが、見渡すところ殆ど門並かどなみと同じようなカツフェーばかり続いて
 いて、うっかりしていると、どれがどれやら、知らずに通り過ぎてしまったり、わるくす
 ると門かどちがいをしないとも限らないような気がするので、君江はぎつと一年ばかり通う身
 でありながら、今だに手前隣てまえとなりの眼鏡屋と金物屋とを目標めじるしにして、その間の路地ろじに入る
 のである。路地は人ひとりやつと通れるほど狭いのに、大きな芥箱ごみばこが並んでいて、寒中
 でも青蠅あおばえが翼はねを鳴ならし、昼中いたちでも鼬いたちのような老鼠ろうねずみが出没して、人が来ると長い尾の先
 で水溜みずたまりの水をはね飛とばす。君江は袂たもとをおさえ抜ぬき足あしして十歩ばかり。やがて裏通を行く
 人の顔も見分けられるあたり。安油の悪臭が襲うように湧わき出してくる出入口をくぐると、
 何処どこという事なく竈かまど虫むしのぞろぞろ這は廻まわっている料理場である。料理場は後あとから建て
 増したものらしく、銀座通に面した表附とはちがつて、震災当時の小屋同然、屋根も壁も
 トタンの海鼠板なまこいた一枚で囲つてあるばかり。それでも土間から急な梯子段はしごだんを土足のまま
 登つて行くと、十畳ばかり畳を敷いた一室があつて、四方の壁際ぐるりと十四、五台ばか
 りも鏡台が並べてある。丁度三時五、六分前。十畳の一室は、朝十一時から店へ出ていた

女給と、今方来たものとの交代時間で、坐る場所もないほど混雑している最中。鏡一台の前にはいずれも女が二、三人ずつ繡眼児押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪を直したり、あるいは立つて着物を着かえたり、大胡坐で足袋をはき替えたりしているのもある。

君江は豎シボの一重羽織をぬいで肩掛と一つにして風呂敷に包んだ。そして廊下への出口に置いてある衣裳棚に、名前の貼紙がしてある処を見てその包を載せ、コンパクトで鼻の先を叩きながら、廊下づたいにパンツリイを通り抜けると、丁度店二階の方から歩いて来る春代という女に出逢った。帰り道が同じ四谷の方角なので、六十人いる朋輩の中では一番心安くなっている。

「春さん。昨夜はグレたんじやないの。後で何かおごつてよ。」

「それアあなたでしよう。わたし随分待つていたのよ。今夜はきつと一緒に帰りましょう。その方が経済だからねえ。」

君江はそのまま表二階の方へ行きかけると、階段の下から下足番をしている男ボーイが、「君江さん、電話です。」と頻に呼んでいる声が聞えた。

「はアイ。」と大声に答えながら、口の中で「誰だろう。いけすかない。」とつぶやきな

がら、テーブルや植木鉢の間を小走りに通り抜けて階段を下りて行った。

階下は銀座の表通から色硝子いろガラスの大口をあけて入る見通しの広い一室で、坪数つぼすうにしたら三、四十坪ほどもあるうかと思われるが、左右の壁際には衝立ついたての裏表に腰掛と卓子テーブルとをつけたようなボックスとかいうものが据え並べてあつて、天井からは挑灯ちようちんに造花、下には椅子テーブルに植木鉢のみならず舞台で使う藪やぶ置だたみのような植込うえこみが置いてあるので、何となく狭苦しく一見唯ただごたごたした心持がする。正面の奥深い片隅に洋酒を棚に並べた酒場があつて、壁に大きな振り時計ふりこ、その下に帳場があり、続いて硝子戸の内に電話機がある。君江は行きちがう人ごとに笑顔をつくりながら、電話室へ駈かけ込み、「もしどなた。」ときくと、電話は君江を呼んだのではなく、清子という女給の聞きちがえであつた。

爪つまさき先で電話室の硝子戸を突きあけ、「清子さん。電話。」と呼びながら君江は反身そりみに振返つてあたりを見廻したが、昼間のことで客はわずかに二組ほど、そのまわりに女給が七、八人集つてゐるばかり。植木の葉かげを透すかして見ても清子の姿は見えない。誰やらが「清子さんは早番でしょう。」という。君江はその通り電話の返事をして硝子戸の外へ出ると、その姿を見て、洋服をきた中年の瘦やせた男が帳場の台に身を倚よせたまま、「君江さ

ん。」と呼留めて、「どうしました。占いは。」

「たった今、見てもらったわ。」

「どうでした。やっぱり男のおもいででしょう。」

「それなら見てもらわなくつても覚えがあるはずじゃないの。もうそんな景気じゃないわ。小松さん。わたし大に悲観しているのよ。」

「へえ。君江さんが……。」と小松といわれた男は円顔の細い目尻に皺をよせて笑う。

年はもう四十前後。神田の何とやらいうダンスホールの会計に雇われている男で、夕方六時に出勤する頃まで、毎日懇意なカツプエーを歩き廻って女給の貸間をはじめ、質屋の世話、芝居の切符の取次など、何事にかぎらず女の用を足してやって、皆から小松さん小松さんと重宝がられるのをこの上もなく嬉しいことにしている男である。いや味な事は言わないかわり、お客になつて飲み食いもした事がない。以前はどこかの箱屋だともいうし役者の男衆だったという噂もある。君江はこの男から日比谷の占者のことをきいたのである。

「君江さん。どうでした。何か手がかりがありましたか。」

「さア。何だか、いろいろな事を言われたけれど、何の事だかわけがわからないのよ。わ

たしの方でも別に何ともきいては見なかつただけだ。」

「それじゃ駄目だ。君江さんと来たら実にのん気だからな。」

「壹円損したわ。」と君江は人に問われて始めて始めて占者の判断の甚要領を得ていながかつた事と、自分のきき方も随分不熱心であつた事に心づいた。最少し向の困るくらい委しくこまかい事まできけばよかつたという気がした。

「でもねえ、小松さん。当分今の通りで別条はないんですとき。覚えているのはそれツきりよ。いろんな事を言われたけれど『何が何だかわからないのヨ』なのよ。まったくき。何しろ占を見てもらうのは生れて始めてでしょう。見てもらいつけないと駄目なものねえ。占もやつぱり聞方があるんじゃないか知ら。」

「占いかたはあつても、別に聞き方はないでしょう。」

「それでも、お医者さまでも始めて見てもらう時には、いろいろこつちから言わなくつちや、いけないツていうじやないの。だから占や何かでもやつぱりそうだろうと思つわ。」

表梯子の方から蝶子という三十越したでつぶりした大年増が拾円紙幣を手にして、「お会計を願います。」と帳場の前へ立ち、壁の鏡にうつる自分の姿を見て半襟を合せ直しながら、

「君江さん。二階に矢さんヤアがいてよ。行つておあげなさいよ。うるさいから。」
「さつき見掛けたけれど、わたしの番じやないから降りて来たのよ。あの人、先に辰子せん たつこさんのパトロンだつて、ほんとうなの。」

「そうよ。日活にっかつの吉さんヨウに取られてしまったのよ。」とはなし出した時会計の女が伝票と剩銭つりせんとを出す。その時この店の持主池田何某なにがしという男に事務員の竹下というのが附したがき随あい、コック場へ通う帳場の傍わきの戸口から出て来る姿が、酒場の鏡に映った。蝶子と君江とは挨拶あいさつするのが面倒なので、さつきと知らぬふりで二階の方へ行く。池田というのは五十年配の齒の出た貧相ひんそうな男で、震災当時、南米の植民地から帰つて来て、多年の蓄財を資本にして東京大阪神戸の三都にカツフェーを開き、まず今のところでは相応に利益を得ているという噂である。

表梯子から二階へ上つた蝶子は壁際のボックスすわに坐つている二人連れの客のところへ剩錢を持って行き、君江は銀座通を見下みおろす窓際のテーブルを占めた矢さんヤアというお客の方へと歩みを運びながら、

「いらつしやいませ。この頃はすっかりお見かぎりね。」

「そう先廻りをしちやアずるいよ。先日はどうも、すっかり見せつけられました。あんな

ひどい目に遇つた事は御在ません。」

「矢さん。たまにやア仕方がないことよ。」と愛嬌を作つて君江は膝頭の触れ合
うほどに椅子を引寄せて男の傍に坐り、いかにも懇意らしく卓の上に置いてある敷島の
袋から一本抜取つて口にくわえた。

矢さんというのは赤阪溜池の自動車輸入商会の支配人だという触込みで、一時

は毎日のように女給のひまな昼過ぎを目掛けて遊びに来たばかりか、折々店員四、五人を
つれて晚餐を振舞う。時々これ見よがしに芸者をつれて来る事もある。年は四十前後、

二ツはめっているダイヤの指環を抜いて見せて、女たちに品質の鑑定法や相場などを長々と
説明するといふような、万事思切つて齒の浮くような事をする男であるが、相応に金をつ
かうので女給連は寄つてたかつて下にも置かないようにしている。君江は既に二、三度芝
居の切符を買つてもらつたこともあるし、休暇時間に松屋へ行つて羽織と半襟を買つても
らつたこともあるので、この次どこかへ御飯でも食べに行こうと誘われれば、その先は何
を言われても、そう情なく振切つてしまふわけにも行かない位の義理合にはなつてゐる。
それ故矢さんからひやかされたのを、なまじ胡麻化すよりも明さまに打明けてしまつた方
が、結句面倒でなくてよいと思つたのである。矢さんは内心むつとしたらしいのを笑いに

まぎらせて、

「とにかく羨うらやましかったな。罪なことをするやつだよ。」とテーブルの周囲に集っているお民たみ、春江、定子さだこなど三、四人の女給へわざとらしく冗談に事寄せて、「お二人でお揃そろいのところを後うしろからすつかり話をきいてしまつたんだからな。人中なのに手も握にぎっていた。」
「あら。まさか。そんなにいちやいやしたければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。わきへ行くわよ。」

「こいつ。ひどいぞ。」と矢ヤさんは撲ぶつまねをするはずみにテーブルの縁ふちにあつたサイダアの壇びんを倒す。四、五人の女給は一度に声を揚げて椅子から飛び退のき、長い袂たもとをかかえるばかりか、テーブルから床ゆかに滴したたる飛沫とばしりをよける用心にと裾すそまで摘つまみ上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒さわぎに抛よんどころ所なく、雑巾ぞうきんを持って来て袂たもとの先を口に啣くわえながら、テーブルを拭ぬぐいている中、新あたらしく上つて来た二、三人連つれの客。いらつしやいまして大年増の蝶子が出迎むかえて「番先ばんさきはどなた。」と客の注文をきくより先に当番の女給を呼よぶ金切声かなきりこゑ。「君江さんでしょう。」と誰やらの返事に君江は雑巾を植木鉢うゑばちの土の上に投な付けて「はアい。」と言いいながら、新来のお客の方へと小走りにかけて行つた。

客は二人とも髭ひげを生はした五十前後の紳士で、松屋か三越あたりの帰りらしく、買物の紙

包たすきを携え、紅茶を命じたまま女給には見向きもせず、何やら真面目まじめらしい用談をしはじめたので、君江はかえってそれをよい事に、ひまな女たちの寄集よりあつまっている壁際のボックスに腰をかけた。テーブルの上には屑羊羹くすようかんに塩煎餅しおせんべい、南京豆なんきんまめなどが、袋のまま、新聞や雑誌と共に散らかし放題、散らかしてあるのを、女たちは手先の動くがまま摘つまんで口の中へと投げ入れているばかり。活動写真の評判や朋輩ほうばい同士の噂うわさにも毎日の事でもう飽あきている。睡気ねむけがさしてもさすがここでは居睡いねむりをするわけにも行かないらしく、いずれも所業しよげいなげに唯時間ただのたつのを待っているという様子。その時隅の方でひとり雑誌の写真ばかり繰りひろげて見ていた女が、突然、

「アラ、実にシャンねえ。清岡先生の奥様よ。」という声に、ボックスに休んでいた女は一齐に顔を差出した。君江も屑羊羹くすようかんを頬張ほおばりながら少し及腰およびこしになつて、

「どれさ。見せてよ。わたしまだ知らないんだからさ。」

「はい。よく御覧なさい。」と以前の女が差付さしつける雑誌の挿絵。見れば、縁側に腰をかけたいる夫人風の女の姿で、「名士の家庭。」「作家清岡進先生の御夫人鶴子さまのお姿。」としてあつた。

「君江さん。あんた、何ともない事。そんなもの見て。わたしなら破やぶいてしまいたくなる

わ。」と写真の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒医者はしやの妻で生活難から女給にょきんになった鉄子である。

「あなた。随分焼餅やきもちやきねえ。」と君江はかえつて驚いたように鉄子の顔を見返して、「いいじゃないの。奥様なら奥様で。気にしないでだつて。」

「君江さんは全く徹底しているわ。」とダンス場から転じてカツプエーに来た百合子ゆりこというのが相槌あいづちを打つと、もとは洋髪屋ようはつやの梳手すきてであつた瑠璃子るりこというのが、

「とにかく一番幸福なのは清岡さんよ。令夫人はシャンだし、第二号は銀座における有名な女給さんだし……。」

「ちよいと何が有名なのさ。止よして頂戴ちやうだいよ。」と君江はわざとらしく憤然ふんぜんと椅子を立たつて、先刻さつきから打捨うちすてて置いた自動車商會の矢田さんの方へと行つてしまった。女たちは無論戯れとは知りながら、少し心配したように斉ひとしくその後うしろすがた姿を見送つたが、瑠璃子はもともと梳子の時分ないない私娼窟ししやくつに出没して君江とも一、二度言葉を交えた間柄偶然このカツプエーで邂逅かいこうしても、互たがいに默契する処があるらしく秘密を守り合つているくらいなので、何を言つてもまた言われても互に気を悪くするはずはないと、平気な顔で、折からテーブルを叩たたくらしい音がするのを聞きつけ、自分が持番の客ではないかと、音す

る方へ目を注ぐ。丁度その途端、階段から上つて来る新しい客の洋服姿が向の壁の鏡に映つたのを早くも認めて、「アラ清岡先生よ。」と瑠璃子は小声で一同に知らせた。

「先生。くしゃみが出なかつて。」と君江とは仲の好い春代が逸早く駈寄つて、「あつちのボックスがいいわよ。」と洋服の袖に縫り、人目につかない隅のボックスへ連れて行つた。これは君江を張りに来る自動車屋の矢田さんが、まだ帰らずにいるので、万一の事を用心した春代の心づかいである。

「歩いて来るともう暑い。黒ビールか何か貰おうよ。」と清岡進は抱えていた新刊雑誌と新聞紙とをテーブルの下の揚板に押入れ、新しい鼠色の中折帽をぬいで造花の枝にかけた。紺地二重ボタンの背広に蝶結のネクタイ。年の頃は三十五、六。鼻先と頤のどがつているのが目に立つので、色の白い眼の大きい頬のこけた顔立は一層神経質らしく見えるのに、長く伸ばした髪をわざと無造作に後に掻き上げている様子。誰が目にも新進の芸術家らしく、また宛然活動写真中に現れて来る人物らしくも見える。その父は漢学者だとかいう事であるが、清岡は仙台あたりの地方大学に在学中も学業の成績は極めて不出来で、卒業の後文学者の仲間入はしたものの、つい三、四年ほど前までは、更に月旦に登るような著述もなかつた。然に、何から思いついたのやら、ふと曲亭馬琴の

小説『夢想兵衛胡蝶物語』を種本にして、原作の紙鳶を飛行機に改め、「彼はどこへでも飛んで行く。」という題をつけ、全篇の趣向をそのまま現代の世相に当てはめた通俗小説を執筆して、或新聞に連載した。これが偶然大当りにあたって、新派俳優の芝居や活動写真にも仕生まれ、爾来名声は藉然として、一作ごとに高くなり、今日では大抵の雑誌や新聞に清岡進の名を見ないものはないような勢になった。

「これも先生の御本。」と春代は遠慮なくテーブルの上の一冊を取り上げ口絵を見ながら、「これはまだ活動にはならないでしょう。」

清岡はわざとうるさいような顔をして、「春さん。ちよつと電話を掛けてくれ。『丸円新聞』の編輯局に村岡がいるはずだから。京橋の丸丸番だよ。呼出してすぐにここへ来いッて。」

「村岡さんて、いつもの村岡さん。」

「そうだよ。」

「京橋の丸丸番だわね。」と春代が行きかけた時、持番の定子というのが、黒ビールと南京豆の小皿を持って来て、酌をしながら、「わたし、先生の小説には思出の深い事があるのよ。あの時分、別に役も何も付いた訳じゃないけれど、始めて蒲田へ這入ったのよ。」

「定さん。蒲田にいた事があるのか。」と清岡はコップを片手に定子の顔を斜ななめに見上げながら、「どうして止よしたんだ。」

「どうしてって。見込みがないんですもの。」

「お世辞じゃないが、定さんのような顔立なら映画には向くんだがね。監督の言う事を聴かないからだろう。女は何になつても男の後援がなくなつちや駄目だからな。女流作家だつて少し売出すまでには、みんな背景があるんだよ。」

その時君江が巻煙草まきたばこを啣くわえながら歩いて来て、黙つて清岡の側そばに腰をかける。春代が戻つて来て電話の返事を伝え、そのまま腰をかけて、

「先生。何か御馳走してよ。君ちゃんは。」

「わたしの方がいいわ。」と清岡が飲残した黒ビールのコップを取上げた。

「おむつまじい事ね。じゃア、春代さん、チキンライスか何か一緒にたべましょう。」と定子は帯の間から取出す伝票紙に注文の品を書きながら立つて行つた。

明り取りの窓にさしていた夕日の影はいつか消えて、階段の下から突然蓄音機が響き出した。これが五時半になつた知らせで、三時過から休んでいた女給も化粧をし直して出てくる。階上階下の電燈には残りなく灯がついて、外はまだ明あかるい夏の夕方方も建物の内ばかり

は早くも夜の景気である。

三

帰り途みちが同じ四谷よつやの方角なので、君江と春代とは大抵毎晩連立つれだつて数寄屋橋すきやばしあたりから円タクに乗る。銀座通では人目に立つのみならず、その辺へんにはカツプエーを出た酔客がまだうろうろ徘徊はいかいしているので、これを避けるため、少し歩きながら、通とお過りる円タクを呼止め、値切る上にも賃銭を値切り倒して、結局三十銭位で承知する車に乗るのである。その晩二人は数寄屋橋を渡つてガードの下を過ぎ、日比谷ひびやの四辻よつ辻近くまで来たが、三十銭で承知する車は一台もない。春代は腹立しげに、「何だい。馬鹿ばかにしている。停とまるかと思つたら、あいつも行つてしまつた。」

「いいわよ。ぶらぶら歩きましょうよ。少し酔つたから丁度いいわよ。」

「もうすっかり夏だわねえ。御堀おほりの方を見ると、まるで芝居の背景見たようねえ。」

日比谷の四辻には電車を待つ人がまだ大分立っている。

「今夜は節約して電車に乗ろうよ。」

二人は道幅のひろい四辻を歩道から線路の方へと歩み寄ろうとした時、横合いからぬつと二人の前へ立ちふさがった洋服の男があつたので、二人はびっくりしてその顔を見ると、今日も午後にかツフェーへ来ていたダイヤモンドの矢田さんであつた。

「まあ、大変御ゆつくりねえ。どこで飲んでいらしたの。」

「送つてあげよう。」と矢田は円タクを呼びかけた。

「わたし、電車でいいのよ。お客様と自動車に乗るのはやかましいから。」と春代は体よく逃げようとすると、矢田は、度々その手を食っていると見えて、

「それア銀座通のことじゃないか。ここまで来れば構やせん。僕が責任を負う。」

「あなたも節約して電車になさいよ。矢さん。」と君江は丁度来かかった赤電車の方へとすたすた行きかけたので、矢田はとやかく言っている暇もなく、二人の後について新宿^{しんじゆ}の電車に乗つた。

案外すいている車の中には、二人の知らない他の店の女給が三人ばかりに、男が五、六人。いずれも居眠りをしている。半蔵門^{はんぞうもん}を過ぎて四谷見附^{よつやみつけ}に来かかる時まで、矢田はさ

すがにおとなしく、連れではないような風をして口もきかずにいたが、君江が春代を残して一人車から降りかけるのを見るや否や、あわててその後について来て、

「君江さん。もう乗換のりかえはないぜ。自動車を呼ぼう。」

「いいのよ。すぐ其処そこですから。」と君江は人通ひとどおりの絶えた堀端ほりばたを本村町ほんむらちようの方へと歩いて行く。円タクの運転手が二人の姿を見て、窓から手を出し指で賃銭の割引を示すものもあれば、垢あかじみた顔を出してひやかすものもある。矢田はびったり寄添い、

「君江さん。どうしても家うちへ帰らなくっちゃいけないのか。一晩ぐらい都合できないのか。エ、君江さん。どうしてもいけなければ、一時間でも、三十分でもいい。話をしてすぐ別れてもいいから、ちよつとつき合つてくれ。僕はそんな無理なことは決して言わない。今夜の中にきつと帰すから。」

「もう晩おそすぎるわよ。ぐずぐずしていると、わたし帰れなくなってしまうから。それに明日あしたは早番だから。」

「早番だつて、あすこは十一時じゃないか。こんな事を言つてぐずぐずしている中に時間うちがたつてしまうじゃないか。この近辺はいけないのか。荒木町あらかちようか、それとも牛込うしごめはど
うだ。」と矢田は君江の手を握つて動かない。

土手上の道路は次第に低くなつて行くので、一歩ごとに夜の空がひろくなつたように思われ、市ヶ谷から牛込の方まで、一目に見渡す堀の景色は、土手も樹木も一樣に蒼く霧のようにかすんでいる。そよそよと流れて来る夜深の風には青くさい椎の花と野草の匂が含まれ、松の聳えた堀向の空から突然五位鷲のような鳥の声が聞えた。

「アラ。何だか田舎へ行つたようねえ。」と君江は空を見上げた。矢田はすかさず、

「どこか静な処へ行こうじゃないか。一晩位犠牲におしよ。僕のために。」

「矢さん。もしか目付かつて、ごたごたしたら、あなた。あの人の代りになってくれること。わたし、実はもうカツフェーなんかよしたいと思つているの。」と君江は矢田の心を引いて見るつもりで、わざと身を摺り寄せながら静に歩き出した。実は今夜連れられて行つた先で、矢田が気前好く祝儀を奮発するかどうかを確めて置こうと思つただけである。「あの入つて、誰だ。この間一緒に邦楽座へ行つた人か。」

「いいえ。」と言いかけて君江は心づき、「え、そうよ。あの人よ。」と狼狽えて言直した。邦楽座へ一緒に行つたのは旦那でも恋人でも何でもない。つまり矢田さんと同様なその場かぎりのお客なのである。

「そうか。あの人が君さんの旦那なのか。」と矢田はすっかり本気にして、「しかし、今

まで世話をしている関係があつちやア、そう急によしてしまふ訳には行かないだろう。恨まれるのはいやだからな。」

君江は噴き出したくなるのを耐えて、「ですからさ。もしも、万一の事があつたらつて言うのよ。知れると面倒だから、今夜の事は誰にも絶対に秘密よ。」

「そんな事は心配しないでつて大丈夫だよ。まさかの時にはきつと僕が引受ける。」と矢田はまず今夜だけはいよいよ自分のものになつた嬉しき。人通のない堀端を幸に、いきなり抱き寄せて女の頬に接吻した。

本村町の電車停留場はいつか通過ぎて、高力松が枝を伸している阪の下まで来た。市ヶ谷駅の停車場と八幡前の交番との灯が見える。

「あすこの交番はうるさいのよ。すこしおそくなると、いろいろな事を聞くから、車に乗りましょう。」

矢田はこの機逸すべからずと、あたりを見廻したが、折悪しく円タクが通らないので、二人はそのまま立止つた。

「わたしの家はすぐ其処の横町だわ。角に薬屋があるでしょう。宵の中には屋根の上に仁丹の広告がついているからすぐにわかるわ。わたしこの荷物を置いて来るから待つ

ててヨ。」

「おい。君さん。大丈夫か。すつぽかしはあやまるぜ。」

「そんな卑怯な真似しやしないわヨ。心配なら一緒にそこまでいらつしやいよ。わたし
が帰らないと、いつまでも下のおばさんが鍵をかけずに置くから。」

高力松の下から五、六軒先の横町を曲ると、今までひろびろしていた堀端の眺望から俄
に変わる道幅の狭さに、鼻のつかえるような気がするばかりか、両側ともに屋並の揃わない
小家つづき、その間には潜門や生垣や建仁寺垣なども交っているが、いずれも破
れたり枯れたりしてあるので、あたりは一層いぶせく貧し気に見える。君江は軒先に魚
屋かなやの看板を出した家の前まで来て、「ここで待っていらつしやい。」と言いつて、魚屋
の軒下から路地へ這入った。矢田はすぐにその後について行こうとしたが、君江の感情を
害しはせぬかと遠慮して、暫く首をのぼして真暗な路地の中をのぞくと、がたりがたり
といかにも具合のわるそうな潜戸くぐりどの音がしたので、いくらか安心はしたものの、どうも、
様子が見届けたくてならぬところから、一歩二歩とだんだん路地の中へ進み入ると、
忽ち雨だれか何かの泥濘ぬかるみへぐつすり片足を踏み込み、驚いて立戻り、魚屋の軒燈けんとうをた
よりに半靴はんぐつのどろを砂利じやりと溝板どぶいたへなすりつけている。間もなく、君江は出て来て、

「アラ、どうしたの。」

「イヤ、ひどい道だ。馬鹿にくさい。猫か犬の糞くそだろう。」

「だから、外で待っていらつしやいッて言つたんじやないの。ほんとに臭くさいわ。あなた。」
と君江は寄添う矢田からその身を離して、「わたし、草履ぞうりだから、足袋たびへくつ付けちゃ、いやヨ。」

矢田は歩きながら、砂利に靴の裏をこすりこすりもとの堀端へ出ると、丁度まがりかど 曲角の軒下まきに薪すみだわらと炭すす俵たわらとが積んであつたのでやつと靴の掃除をし終つた時、呼びもしない円タクが二人の前に停とまつた。

「神楽かぐらざか阪。五十銭。」と矢田は君江の手を取つて、車に乗り、「阪の下で降りよう。それから少し歩こうじやないか。」

「そうねえ。」

「今夜は何となく夜通し歩きたいような気がするんだよ。」と矢田は腕をまわして軽く君江を抱き寄せると、君江はそのまま寄りかかつて、何も彼かも承知していながら、わざと、
「矢ヤさん。一体どこへ行くの。」ときいた。

矢田の方でも随分白ばツくれた女だとは思ひながら、その経歴については何事も知らな

いので、表面は摺すれていても、その実案外それほどではないのかという気もするので、この場合は女の仕向けるがまま至極おとなしい女給さんとして取扱っていれば間違いはないと、君江の耳元へ口を寄せて、「待まち合あいだよ。」と囁ささやき聞かせ、「差しつかえはないだろう。今夜は晚おそいからね。僕の知つてる処がいいだろう。それとも君江さん。どこか知つてゐるなら、そこへ行こう。」

思いがけない矢田の仕返しに、さすがの君江も返事に困り、「いいえ。何処どこだつてかまわないわ。」

「じゃ、阪下で降りよう。尾沢カツフェーの裏で、静な家を知っているから。」

君江はうなずいたまま窓の外へ目を移したので、会話はなしはそのまま杜絶とだえる間もなく車は神楽阪の下に停つた。商店は残らず戸を閉め、宵の中賑うごぎな露店も今は道端みちばたに芥あかたや紙屑かみくずを散らして立去つた後、ふけ渡つた阪道には屋台の飲食店がところどころに残っているばかり。酔つた人たちのふらふらとよろめき歩む間を自動車の馳かけ過する外ほかには、芸者の姿が街をよこぎつて横町から横町へと出没するばかりである。毘沙門びしゃもんの祠ほこらの前あたりまで来て、矢田は立止つて、向側の路地口ろじぐちを眺め、

「たしかこの裏だ。君江さん。草履ぞうりだろう。水溜りみづたまがあるぜ。」

石を敷いた路地は、二人並んでは歩けないほどせまいのを、矢田は今だに一人先に立つて行つたら君江に逃げられはせぬかと心配するらしく、ハメ板に脇や肩先が触るのもかまわず、身を斜ななめにしながら並んで行くと、突つき当りに稲荷いなりらしい小さな社やしろがあつて、低い石垣の前で路地は十文字にわかれ、その一筋ひとすじはすぐさま石段になつて降り行くあたりから、その時静しずな下駄げたの音と共に棲つまを取つた芸者の姿が現れた。二人はいよいよ身を斜にして道を譲りながら、ふと見れば、乱れた島田の髻たばに怪あやし気げな癖くせのついたのもかまわず、歩くのさえ退儀たいぎらしい女の様子。矢田は勿論もちろんの事。君江の目にも寐静ねしずつた路地裏の情景が一段艶なまめかしく、いかにも深ふけ渡つた色町いろまちの夜らしく思いなされて来た見え、言合したように立止つて、その後姿を見送つた。それとも心づかぬ芸者は、稲荷の前から左手へ曲る角の待合の勝手口をあけて這入はいるが否や、疲れ果てた様子とは忽ち變つた威勢のいい声で、「かアさん。もう間に合わなくなつて。」

君江は耳をすましながら、「矢ヤさん。わたしも芸者になろうと思つたことがあるのよ。ほんとうなのよ。」

「そうか。君江さんが。」と矢田はいかにもびっくりしたらしく、その事情わけをきこうとした時、早くも目指した待合の門口へ来た。内にはまだ人の氣勢けいはいがしていたが、門の扉の閉

めてあるのを、矢田は「おいおい」と呼びながらたた敲くと、すぐに硝子戸ガラスドの音と、下駄をはく音がして、

「どなたさま。」と女の声。

「僕。矢さんだよ。」

「あら、大変御ゆっくりねえ。」と門の扉を明けた女中は、君江の姿を見て、いくらか調子を改め、「さア、どうぞ。」

女中は廊下の突当りから、かわや廁らしい杉戸の前を過ぎて、がとうぐち瓦塔口の襖ふすまをあけ、奥まった下座敷しもぎしきの四畳半に案内した。今しがたまでお客がいたものと見え、酒のかおりと共に、たばこ煙草の烟も籠こもつたままで、したん紫檀の卓テーブルの溝みぞには煎豆いりまめが一ツ二ツはさまっていた。女中は片隅すみに積み載せた座布団ざぶとんを出し、「ただ今綺麗いませれいにいたします。やっと今方片づいた処ところなんで御ご在ざいますよ。」

「大した景気だな。」

「いいえ。相変らずで仕様が御在ません。」と女中はお定さだまりの茶菓を取りにと立って行く。

「すこし明けようじゃないか。」

「蒸し蒸しするわねえ。」と君江はいざりながら手を伸して障子を明けると、土庇の外どびさしの小庭に燈籠とうろうの灯ひが見えた。

「あら、いいわね。芝居のようだわ。」

「カツフェーとはまた別だな。これが江戸趣味ツていうんだらうな。」と矢田は沓脱くつぬぎ石の上かみに両足を投出して煙草へ火をつけた。

植込を隔とて隣の二階の窓が見える。簾すだれがおろしてあるが障子の上かみに、島田しまだに結ゆった女おんなが立つて衣服きものをぬいでいるらしい影かげのありあり映うつっているのを見て、君江はそつと矢田の袖そでを引いたが、それと同時に艶なまめかしい影は雲のように大きく薄うすくなつたまま消え去つて、かすかな話声ばかりになつた。矢田は何の事やら気がつかなくなつたらしく、石の上に両脚を踏みのぼしたまま洋服の上着を脱ぎ、ネキタイを解きかけたが、君江は女中が茶を運び、続いて浴衣ゆかたを持つて来る時まで、そのままぼんやり隣の火影ほかげを眺めていた。何ともつかず、突然君江は待合まちあひというところへ初めて連れ込まれた時の事を憶おもひ出したからである。場廻ばまわは牛込ではなく、大森であつたが、中庭を隔とてた植込うゑいの彼方かなたに二階の灯影ほかげを見ながら男と二人縁側に腰をかけて、女中が仕度するのを待つていたその場の様子は今夜と少しも変りがない。変つたのは自分の心持ばかり。その時分恐おそしかったり珍めづしかったりした事は、も

う馴れた上にも馴れきつて、何とも思わなくなつてしまつた。

「君さん。何かたべるか。もう支那蕎麦ぐらいしか出来ないとき。」

矢田の声に君江は振り返ると、洋服を浴衣にきかえ、立つてしごきを結びかけている。

「わたし、ほしくないわ。」と君江も一重羽織の紐を解きかけた。

女中は矢田の洋服を入れた乱箱を片隅に運び、「今夜はどこもふさがつておりますから、お狭いでしようけれど、ここで、どうぞ。」と床の間につづいた押入から夜具を取出したので、二人は再び濡縁に腰をかけて庭の方を向いた。君江の眼にはいよいよ初めの夜の事が浮んで来る。

「お風呂はいつでもわいておりますから。」と女中は出て行く。

「君さん。何を考えているんだ。お着かえよ。」と矢田は心配そうに横顔を覗き込んで君

江の手を取つた。

君江は羽織をきたまま坐つたなりで、帯揚と帯留とをとり、懐中物を一ツ一ツ畳の上に抜き出しながら、矢田の顔を見てにつこりした。君江は三年前、家を飛出して、学校友達で人の妾になつていた京子の許に身を寄せ、その旦那の世話で保険会社の女事務員になつて、僅一、二カ月たつたため中、早くも課長に誘惑されて大森の待合に連れられて

行つた。これが實際男と戯れた初めであつたが、君江はその前から京子が旦那の目をかすめていろいろな男を妾宅へ引入れるさまを目撃していたのみならず、折々は京子と旦那との三人一ツ座敷へ寝たことさえある位で、言わば待合か芸者家の娘も同様、早くから何事をも承知しぬいていただけ、時にはなお更甚しく好奇心に駆られる矢先。課長の誘惑をよい事にしてこれに応じたまでの事である。課長は五十を越した道楽者にも似ず、その晩君江が酒も飲めば冗談も言うし、更に気まりのわるい事を知らない様子に、かえつて興をさましたらしく、そこそこにその場を引上げた。それらの事を憶い返して、君江はおぼえず口の端に微笑を浮べたのを、矢田は何事も知らないので、笑顔を見ると共に唯嬉しさのあまり、力一ぱい抱きしめて、

「君さん、よく承知してくれたねえ。僕は到底駄目だろうと思つて絶望していたんだよ。」
「そんな事ないわ。わたしだつて女ですもの。だけれど男の人はすぐ外の人に話をするから、それでわたし逃げていたのよ。」と君江は男の胸の上に抱かれたまま、羽織の下に片手を廻し、帯の掛けを抜いて引き出したので、薄い金紗の袷は捻れながら肩先から滑り落ちて、だんだら染の長襦袢の胸もはだけた艶しさ。男はますます激した調子になり、
「こう見えたつて、僕も信用が大事さ。誰にもしやべるもんかね。」

「カツフェーは実に口がうるさいわねえ。人が何をしたって余計なお世話じゃないの。」
 と言いながら、端折りのしごきを解き棄て、膝の上に抱かれたまま身をそらすようにして
 仰向きに打倒れて、「みんな取つて頂戴、足袋もよ。」

君江はこういう場合、初めて逢つた男に対しては、度々馴染を重ねた男に対する時よりもかえつて一倍の興味を覚え、思うさま男を悩殺して見なければ、気がすまなくなる。いつからこういう癖がついたのかと、君江は口説かれてる最中にも時々自分ながら心付いて、途中で止めようと思ひながら、そうなるとかえつて止められなくなるのである。美男子に対する時よりも、醜い老人やまたは最初のやだと思つた男を相手にして、こういう場合に立到ると、君江はなお更烈しくいつもの癖が増長して、後になって我ながら浅間しいと身顛いする事も幾度だか知れない。

この夜、平素気障な奴だと思つていた矢田に迫まれて、君江は途中から急にその言うがままになり出したのも、知らず知らずいつもの悪い癖を出したまでの事である。

四

翌日の朝、矢田と合乗りした自動車から、君江はひとり士官学校の土手際で降りて、路地の貸間に立戻ったが、鏡台の前へ坐ると、急に眠くなつて来て化粧をし直す力もなく、わずかに羽織をぬぎすてたばかり。着のみ着のまま、ごろりと横になった。腕時計の針はまだ九時半をさしたところなので、十時まで三十分間眠るつもりで眼をつぶったのであるが、^{たちま}忽ち格子戸につけた鈴の音と共に男の声のするのを聞きつけて耳をすますと、思いがけない清岡の声なので、君江はびっくりして^{おきな}起直った。

清岡がこの貸間へ来るのは、いつも君江がその翌日五時出の^{おそばん}晩番に当る前の夜にきまつている。それも大抵カツプエーにいる間から^{あらかじ}予め知れていることで、今日のような早出の朝、不意に尋ねて来ることは滅多にない。君江は昨夜のことが知れたのではないか。それにしては知れ方が早過ると、心の中では随分あわてながら、何喰わぬ顔で^{いきお}勢好く、「お早いことねえ。まだ散らかしたまんまなのよ。」と^{はしごだん}梯子段を降りて行くと、清岡は丁度靴をぬいで上ったばかり。戸口を掃いていた^{おば}小母さんも^{ぬけめ}抜目のない^{たぬき}狸婆と見えて、「君江さん。おいやでも、もう一度おばさんの薬を上つてお出かけなさいましよ。昨夜は

ほんとにびつくりしました。」

君江はそれに力を得て、「もう大丈夫よ。きつと食たべ合せあわがわるかったのねえ。」
 「どうかしたのか。お腹なかでも下したのか。」と言いなながら清岡は二階へ上つて、窓へ腰をかけた。

二階は六畳に三畳の二間つづきであるが、前まえ桐ぎりの安やす箆だん筒すと化粧鏡と盆に載せた茶器の外には殆ほとん何どにもない。箆筒の上にも何一ツこまごました物も載せられていないので、二階中はいかにもがらんとして古畳と鼠ねず壁みかべのよごれが一際ひと目ときわに立つばかり。座布ざぶ団とんも色のさめたメリンスの汚しみ点みだらけになったのが一枚、鏡台の前に置いてある外ほかには、木綿の随分古ぼけた夏物が二枚壁際に投出されているばかりである。君江はいつものように鏡台の前の座布団を裏返しにして清岡にすすめると、清岡はそれを窓の敷居の上に載せ、ズボンの折目を気にしながら再び腰をかけた。

窓の下はコールタの剥はげたトタン葺ぶきの平屋根で、二階から捨てる白おしろ粉いや歯は磨がの水みづの痕あとばかりか、毎日掃出はきだす塵ちりほこりに糸屑いとくずや紙屑かみくずもまぎっている。この汚らしい屋根の彼か方は、士官学校門前の通に立っている二階家の裏側で、汚い洗濯物や古毛布や赤児のおしめが干してある間から、絶えずミシンの音やら印刷機の響こが聞える。これと共に士官学校

の構内で生徒の練習する号令の声、軍歌の声、喇叭ラッパの響のみならず、昼の中うちは馬場の砂すなけが折々風の吹きぐあいで灰のように飛んで来て畳の上のみならず襖ふすまをしめた押入おしいれの内までじやりじやりさせる事がある。清岡は丁度去年の今頃、初めて君江に導かれてこの貸間に立寄った時から、もう少しあたりの清潔な居心地の好い処へ引越したらばと勧めていたが、君江は唯口先でばかり同意しながら、その実今日まで更に引越そうとする様子もなく、家具も一年前と同じで、その後新あらたに湯呑ゆのみ一つ買った事もないらしい。金には決して不自由していないのに、机いこも衣桁いこうもなく、電気の笠もかけたままで、いつまでたつても、今方引越して来たばかりだという体裁である。君江は年頃の女のように、窓に草花の鉢を置いたり、箆筒へいとうの上に人形や玩具を飾り立てたり、壁に絵葉書を貼ったりするような趣味は全然持つていない。とにかく一風変った妙な女だと清岡は早くから心付いていた。

「お茶はいらない。もうそろそろ出掛ける時分だろう。」と清岡は窓から座布団と共に腰をすべらせて畳の上に胡坐あぐらをかき、「僕もこれから新しん宿じゆくの駅まで用事があるんだよ。それでちよいと寄つて見たんだ。」

「そう。でも、お茶だけ入れましようよ。おばさん。お湯がわいているなら頂ちやうだい戴。」

と叫びながら下へ降り、すぐに瀬戸引せとびきの葉罐やかんを提さげて来た。

「昨日、お前、占を見てもらいに行つたんだつてね。『街巷新聞』に出た黒子の一件は、誰がいたずらをしたのか当がついたか。」

「いいえ。当も何もつかないわ。」と君江は久須の茶を湯呑につきながら、「初めは、いろいろな事をきいて見ようと思つて出かけて見たんだけれど、何だか気まりがわるいから止してしまつたのよ。だけれど、考えるとほんとに不思議ねえ。誰も知っているはずがない事なんですもの。」

「占いでわからなければ、今度は巫女か、お先狐にでも見てもらうんだな。」

「巫女ツて何。」

「知らないのか、よく芸者なんぞが見てもらうじやないか。」

「わたし、占者だつて全く昨日が始てですもの。何だか馬鹿馬鹿しいような気がするから、ああいう事はわたしには駄目よ。」

「だから、気にしない方がいいツて僕は最初からそう言つてるじやないか。」

「でもあんまり不思議なんですもの。知れようはずのない事が知れたんですもの。まったく不思議だわ。」

「自分ばかり知れないと思つていても、世の中には案外な事があるからね。秘密はかえつ

て漏れやすいものさ。」と言ひ終つて清岡は自分から言過ぎたと心付き、急いで煙草たばこを啣くわえながら君江の顔色を窺うかがうと、君江の方でも何か言おうとしたのをそのまま黙つて、飲みかけた湯呑を口の端に持ち添えたまま、じろりと清岡の顔を見たので、二人の目はぴつたり出遇であつた。清岡は煙草の烟けむりにむせた風をして顔を外向そむけ、

「何でも気にしないのが一番いいよ。」

「ほんとうねえ。」と君江の方でも心からそう思つてゐるらしく見せかけるために、声まで作つたが、それなり後の言葉が出て来ないので、湯呑の茶をゆっくり飲干して静に下に置いた。君江は昨夜矢田と神楽坂へ泊つた事は知られていないにしても、何しろ二年越しの間柄なので、何事に限らず大抵の事は清岡には知られてゐると思つてゐるが、さてどの辺まで知られてゐるか、それは君江にも当がつかない。君江は何か好い折があつたら、清岡とは關係を断たつてさっぱりとして、自分の過去の事を少しも知らない新しい恋人を得たといふ氣にもなつてゐる。君江はどういう訳わけだか、自分の平生を人に知られてゐる事を好まない。秘密にする必要がない事でも、君江は人に問われると、唯にやにや笑いにまぎらすか、そうでなければ口から出まかせな虚言うそをつく。最親もつともしいはずの親兄弟に對しては君江は一番よそよそしく決して本心を明した事がない。自分の方から好きだと思ふ男に對

してはなお更の事で、その男が何か深く聞知ろうとすればいよいよ堅く口を閉じて何事も語らない。同じ店につとめているカツフェーの女給連は、君江さんほど姿の優しいしとやかな人はないが、不断何を考えているのやらあれほど訳のわからない人もないと言われているのである。

清岡が君江を識しつたのは君江が始めて下谷池したやいけの端はたのサロン、ラックという酒場の女給になつたその第一日の晩からであつた。清岡は始めて君江を見た時、女給をした事がないというならば、どこかで芸者をしていた女だろうと想像した。容貌はまず十人並なみで、これと目に立つ処はない。額は円まるく、眉まゆも薄く眼も細く、横から見ると随分しやくれた中低なかびくの顔であるが、富士額ふじびたいの生際はえぎわが鬢かつらをつけたように鮮あざやかで、下唇の出た口元に言われぬ愛あ嬌いきよつがあつて、物言う時歯並ひとぎわの好い、瓢ひょうの種このような齒の間から、舌の先を動かすのが一際ひとぎわ愛くるしく見られた。この外には色の白いのと、撫肩なでがたのすらりとした後姿が美点の中の第一であろう。清岡はその晩、君江が物言いのしづかなのと、挙動の疎暴でないのを殊更うれしく思つて、纏頭ちんづぶは拾円奮発してその帰途をそつと外で待つていた。それとは心づかない君江は広小路ひろこうじの四辻まで歩いて早稲田行わせだの電車に乗り、江戸川端ばたで乗換え、更にまた飯田橋いいたばしで乗換えようとした時は既に赤電車の出た後であつた。清岡は自動車で

ここまで跡をつけて来たので、そつと車を降り、偶然再会したような振りで話をしかけた。君江は問われてもはつきり住処は知らせなかつたが、唯市ヶ谷辺だと答えて、一緒に外濠を逢阪下あたりまで歩いて行く中、どうやら男の言うままになつてもいいような素振を示した。

君江はその頃、久しく一緒に住んで共に私娼をしていた京子という女が、いよいよ小石川諏訪町の家をたたくで富士見町の芸者家に住込む事になつたので、泣きの涙で別れ、独り市ヶ谷本村町の貸二階へ引移り、私娼の周旋宿へ出入する事をよしていたので、一月あまりの間一晚も男に戯れる折がなかつた。夜ふけてから外へ出た事さえ稀だったので、この夜久しぶり静にふけ渡つた濠端の景色を見てさえ、何とも知れず心の浮き立つ折から、時候も丁度五月の初めで、袷の袖口や裾前から静に夜風の肌を撫でる心持。君江は清岡の事を少壯の大学教授か何かだろうと、始めからわるく思っていないので、飛び立つような嬉しさをわざと押隠し、誘われるがまま気まりのわるい風をしながら、その夜は四谷荒木町の待合へ連れられて行つた。君江は新に好きな男ができると思ち熱くなつて忽ち冷めてしまうという、生れついでに浮気者なので、翌日も夕方近くまでいちゃついていたが、離れるのがいやさにカツフェーもそれなり休んで、井の頭公園の旅

館に行き次の夜は丸子園まるこえんに明あかして三日の後、市ヶ谷の貸間まで一緒に来てやつとわかれた。

清岡は丁度その頃、一時めかけ妾めかけにしていた映画女優の玲子とやらを人に奪われ、代りの女を物色していた矢先、君江が身も心も捧げ尽したような濃厚な態度に、すっかり迷い込み、どんな贅ぜいたく沢たくな生活でも望む通りにさせてやるから、女給をやめるようにと勧めたが、君江は将来自分でカツフェーを出したいから、もう暫く女給をしたいと言った。それならば本場の銀座へ出て経験をした方がよいと、池ノ端のサロンは一カ月あまりで止めさせ、半月ばかり京阪を連れ歩いた後、清岡は人を介して、銀座では屈指のカツフェーに数えられて現在のドンフワンに君江を周旋した。間もなく入梅があげて夏になり、土用の半なかばからそろそろ秋風の立ち初める頃まで、清岡は何一つ疑う所もなく、心から君江に愛されているものとはばかり思込んでいた。ところが或ある夜二、三の文学者と芝居の帰り、銀座に立寄って見ると、君江は急に心持がわるくなつたと言つて夕方から店を休んだという事を、他の女給から聞き、友達にわかれてから、一人本村町の貸間へ病氣見舞いに行こうとした時、いつも曲る濠端の横町から、突つと現われ出た女の姿を見た。まだ十二時前ではあつたが、片かたがわ側町の人家は既に戸を閉め、人通りも電車も杜絶とだえがちになつた往来には円タク

が馳^{かけ}過^するばかり。清岡は四、五間^{けん}こちらから、白っぽい紹^ろ縮^{ちり}緬^{めん}の着物と青竹の模様の夏帯とで、すぐにそれと見さだめ、怪訝^{かいが}のあまり、車道を横断して土手際の歩道を行きながら女の跡をつけた。女はスタスタ交番の前をも平気で歩み過るので、市ヶ谷の電車停留場で電車でも待つのかと思いの外^{ほか}、八幡の鳥居を入れて振返りもせず左手の女阪を上つて行く。いよいよ不審に思いながら、地理に明い清岡は感づかれまいと、男の足の早さをたのみにして、ひた走りに町を迂回^{うかい}して左内阪^{さないざか}を昇り神社の裏門から境^{けい}内^{ない}に進^{すす}入^みつて様子を窺^{うかが}うと、社殿の正面なる石段の降口に沿い、眼下に市ヶ谷見附一帯の濠を見下す崖^が上^{けつえ}のベンチに男と女の寄添^{よりよ}う姿を見た。尤^ももベンチは三、四台あって、いずれも密会^{みつわい}の男女が肩を摺^{すり}寄^よせて腰をかけていた。清岡はかえつて好い都合だと、桜の木立を楯^{たて}にして次第次第に進み寄り、君江がどんな話をしているかを窺^{うかが}い、同時に相手の男の何者たるかを見定めようと試みた。

清岡はいかなる作者の探偵小説中にも、この夜の事件ほど探偵に成功したはなしは恐らくあるまいと、殆どその瞬間には驚^{きやう}愕^{がく}のあまり嫉妬^{しつと}の怒りを発する暇がなかつたくらいであった。男はパナマらしい帽子を冠^{かぶ}り紺地^{こんじ}の浴衣^{ゆかた}一枚、夏羽織も着ず、ステッキを携えている様子はさして老人とも見えなかつたが、薄暗い電燈の灯影^{ほかげ}にも口髭^{くちひげ}の白さは目

に立つほどであった。腕をまわして帯の下から君江の腰を抱きながら、

「なるほどここは涼しい。お前のおかげで、おれもいろいろな事を経験するよ。六十になつてベンチで女を待ち合はすなんて、実に我ながら意外だ。この社殿の向に今でもきつと大弓場があるだろうが、おれも若い時分に弓をやりに来たことがあつた。それから何十年とこの石段を上つた事がない。それはそうと今夜はこれからどこへ行かうというんだね。こここのベンチでもいいよ。はははは。」と笑いながら君江の頬に接吻した。

君江は黙つて、暫くの間老人のなすがまになつていたが、やがて静にベンチから立ち上り着物の裾前を合せ、鬢を撫でながら、「すこし歩きましょう。」と連立つて石段を降りる。清岡は先刻君江が昇つた女阪の方へ迂回つて見えがくれに後をつけた。それとは知らない二人は話しながら堀端を歩いて行く。

「京子は富士見町へ出てから、どうだね。あの女のことだから、きつといそがしいだろう。」

「毎日昼間からお座敷があるんですつて。この間ちよいと尋ねたのよ。だけれどろくろく話をしている暇もなかつたのよ。あなた。これから寄つて見ない。いなかつたらいなかつたで、別にかまやアしないから。」

「うむ。久しぶり、三人で夜明しするのも面白い。諏訪町の二階では実にいろいろな事をしたね。とにかくお前と京子とは実にいい相棒だよ。僕は昼間真面目な仕事をしている最中でも、ふいと妙な事を考え出すと、すぐにお前の事を思出す。それから京子の事を思出して、夢でも見ているような心持になるんだ。」

「それでも京子さんに較べれば、わたしの方がまだ健全だわねえ。」

「どっちともいえない。お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。カッフエーへ行つてから別に変つたのも出来ないかね。西洋人はどうだ。」

「銀座はあんまり評判になり過るから、そう思うようにはやれないわ。そこへ行くと芸者の方が大びらで、面倒臭くなくつていいわ。諏訪町にいる時分はほんとに面白かつたわね。」

「旦那はあれつきりか。まだ出て来ないのか。」

「そうですね。その後別に話が出ないから、どの道もう関係はないんでしょう。それにもともと京子さんの方じゃ、借金を返してもらつた義理があるだけで、別に何とも思つていた訳じゃないんだから。」

「今度は何て言っている。やはり京子というのか。」

「いいえ。京葉きょうわさんていうのよ。」

二人は夜ふけの風の涼しさと堀端のさびしさを好い事に戯れながら歩いて新見附しんみつけを曲り、一口阪ひとくちざかの電車通から、三番町さんばんちょうの横町よこちょうに折れて、軒燈けんとうに桐花家きりはなやとかいた芸者家の門口かどぐちに立寄った。夏の夜の事で、その辺の芸者家ではいずれもまだ戸を明けたまま、芸者は門口の涼台すずみだいに腰をかけて話をしているのを、男はなれなれしく、

「京葉さんはいますか。」ときくと、直に家の内から、小づくりの円顔まるがお。髪はつぶしにたけながを結んだ女が腰の物一枚、裸体のまま上あがり櫃がまちへ出て来て、

「あら、御一緒。まあうれしいわね。わたし今帰って来たところ。丁度よかったわ。」

「どこかい家を教えろよ。ゆつくり話をするから。」

「そうねえ。それじゃア……。」と裸体の女は行先を男に囁くと、二人はそのまま歩いて四ツ角をまがる。

ここまで跡をつけて来て路地のかげに身をひそめていた清岡は、万事があまりに都合好く進しんちよく捗とくして行くので、このまま中途ちゆうとから帰るわけには行かなくなつた。頃合いを計つて、清岡は君江のつれられて行つた同じ待合へと、振りの客になり済まして上り込み、女中には勘定を先に払つて、なりたけおとなしい若い芸者をといていい付け、素知らぬ振りで

寝てしまった。そして彼の見知らぬ老人が君江と京葉の二人を相手の遊びざまを思い残りなく窺った後、翌日の朝はまだ日の照らぬ中清岡はそつとその待合を出た。しかし赤阪の家へ帰るには時間が少し早過るので、やむことをえず四番町の土手公園を歩みベンチに腰をかけて、ぼんやりとして堀向うの高台を眺めた。

清岡は三十六歳のその日まで、夢にも見なかつた事実を目撃し、これまで考えていた女性観の全然誤っていた事を知つて、嫉妬の怒りを発する力もなく、唯わけもなく鬱ぎ込んでしまった。清岡はその日まで、独り君江に限らず世間の若い女が五六十の老人に身を寄せて平気でいるのは、恋愛と性慾との不満足を忍んでひたすら生活の安定を得ようがためとばかり思込んでいたのであるが、豈図らんや。事實は決してそうでない。自分ばかりを愛していると思つていた君江の如きは、事もあろうに淫卑な安芸者と醜悪な老翁と、三人互に嬉戯して慚る処を知らない。清岡は自分の経験と観察とのいかに浅薄であつたかを知ると共に、君江に対しては言うに言われぬ憎悪の念を覚え、このままもう二度と顔は見まいと思つた。しかしその日家へ帰つてから一ト寐入りして目をさますと、一時激昂した心も大分おちついてゐる。それと共にこのまま何事をも知らぬ顔に済してしまふのは、あまり言甲斐がなさ過る。面責した上、女の口から事実を白状させてあやまらせねば、どう

も気がすまない。しかしまた更に思直おもいなおして見ると、君江は見掛けに似ず並大抵の女でない。問われるままに案外無造作に白状してしまうかも知れない。それと共に自分の遊び足りない事と嫉妬を起した事などを心窃こころひそかに冷笑しないとも限らない。これは男の身に取つては浮気をされたよりも、なお更忍びがたい侮辱である。清岡は黙殺するのも無念だし、表面は謝罪あやまつて、蔭で舌を出されるのはなお更口惜くやしいと、さまざま思案した末、やはり何事をも知らぬ振りで表面は今まで通り、あくまで馬鹿にされながら、その代りいつか時節を待つて、痛烈な復讐ふくしゅうをしてやるに若くしはないと決心した。

清岡は多年原稿生活を営む必要上、腹心の男を二人使っている。一人は村岡と云つて、早稲田わせだあたりを卒業したばかりの文士で、毎月百円内外の手当を貰もらい、清岡の口述する小説を筆記して原稿を製作すると、それを駒田という五十年輩の男が新聞社や雑誌社へ売込みに行く。駒田は多年ある或新聞社の会計部に雇われていたので、原稿料の相場にも明あかると記者仲間にも知己が多いので、清岡の受取るべき稿料の二割を自分の所得にする約束で働いているのである。清岡は門人同様の村岡に命じて、君江が歌舞伎座へ見物に行つた帰途、安全剃刀かみそりの刃で着物の袂たもとを切らせた。尤もその衣類は清岡が買ってやつたものである。暫くしばらしてから清岡はこれも三越で自分が買ってやつた真珠入の櫛くしを、一緒に自動車に乗つ

た時、その降り際にそつと抜き取つて見た。君江はきつと泣いて騒ぐだろうと思いの外、さして気にも留めないらしく、清岡にもまた間貸しのおばさんにも別にそんな話さえない様子であつた。

君江は極めてじだらくで、物の始末をしたことのない、不経済な女である代り、着物もそれほど着たがらない事は清岡も不断から心づいてはいたものの、かくまで無頓着だとは思つていなかった。そこで、留守の中に窃と猫の兎の死骸を挿入の中に投込んで様子を見たが、これさえさほど恐怖の種にはならなかつたらしいので、遂に清岡はわるくすると感付かれるかも知れぬと危ぶみながら、君江が内股の黒子の事を、村岡にいい付けて『街巷新聞』に投書させたのであつた。これは大分君江の心を不安にさせたらしいので、清岡は内心それ見ると幾分か胸のすくような心地がした。しかし一度目が覚めた後、君江の生活を探偵して見るといよいよ腹の立つ事ばかりなので、報復の手段も唯一時の悪戯ではなかなか気がすまないようになる。もつと激烈な痛苦を肉体と精神とに加えてやる機会を窺うため、清岡は十分相手に油断をさせ、こちらの胸中を悟られぬよう、以前にも増してあくまで惚れ込んでいるような様子を示すようにしていたが、平常心の底に蟠っている怨恨は折々われ知らず言葉の端にも現われそうになるのを、清岡は非常な努力でこれを押

えていなければならない。

今方占者のはなしから、清岡は我知らず言過ぎたと心付き狼狽うろたえて言いまぎらしたのも、実はこういう事情わけからである。このまま長く向い合つて二階にいるのはよくないと心づいて、腕時計を見ながら、いかにも驚いたように、「もう十時半だ。そこまで一緒に出かけよう。」

君江の方でも昨夜泊つたまままだ湯にさえ入らぬ身のまわりを男に見廻されるのが、何となく辛くてならないので、何はともあれ一まず外へ出るに如しくはないと考え、

「ええ。少し歩きましょう。お天気が好いと店へ行くのがいやになるわ。一日、日の目を見ずにいるんだから。」とぬぎ捨ててあつたたて豎しぼの一重羽織を引掛けて、窓の障子をしめた。

「今日十一時だと明日あしたは五時出だね。」

「ええ。だから、今夜店へいらしてよ。何処どこかゆつくり遊びに行きたいわ。いいでしょう。」

「そうだな。」と男は曖あいまい昧な返事をしながら帽子を取った。

「ねえ、遊びに行きましょうよ。どの道今夜はゆつくり遊ぶ日じゃないの。」と君江は既

に梯子段はしごだんの降口に出た清岡の身に寄添い、接吻してと言わぬばかりに顔を近寄せ、睫毛まつげの長い目を軽くふさいだ。

清岡は憎い仕方だとは思いつながら、もともと嫌いではない女のいかにも艶なまめかしく情を含んだ姿を見ると、その瞬間はさすがに日頃の怒りも何処へやら消え去って、生れつき売笑婦にでき上っているこういう女に対して、道徳上とやかく非難するのはあるいは過酷かも知れない。男の劣情を挑発する一種の器械だと思えば、自分の見ない処で何をしていても更に咎とがむべき事ではない。弄もてあそぶだけ弄んで随意に捨ててしまえばそれでよいのだというような心持にもなる。忽たちまち進んで、それにしてもこの女がもすこし自分の心を汲くみ分け、その身を慎しんで、自分の専有物になつてくれればという欲望が次第に強くなつて来る。清岡は横を向いてさり気なく、

「とにかく夜になつたら銀座で逢あおう。その時にきめよう。」

「ええ。そうして頂ちようだい戴だい。」と君江は急に明あかるい顔になつて一足先にばたばたと下へ降り、おぼさんの手から雑巾ぞうきんを奪い取つて、手ずから清岡の靴を拭いた。

市ヶ谷の堀端へ出る横町は人目に立つので、二人は路地から路地を抜けて士官学校の門前いに出で比丘尼坂びくにざかを上つて本村町ほんむらちようの堀端を四谷見附の方へ歩いた。昼前のことで、二

人は並びながらも少し離れて話もせず、君江は日傘に顔をかくしていたが、ふとこの堀端は昨夜十二時過電車を降りてから矢田と手を引合つて歩いた同じ道だと思うと、夜と昼との相違から、君江はどうして昨夜はあんな矢田のような碌ろくでもない男の言う事をきく気になつたのだろうか、自分ながらその腑ふ甲が斐いなさに厭いやな心持がした。清岡さんがそれと知つたらどんなに怒ることだろうと、日傘のかげからそつと男の横顔を窺うかがうと、少しは気が咎とがめもするし、またいかにも気の毒でならないような心持もして、これからはカツフェーの帰り道にはなりたけ慎しんでその場かぎりの浮気は起すまいという気にもなる。せめての申訳しんせきというではないが、何やら急に清岡の事が恋しくなつて、君江は歩きながら突つと摺すり寄よつて人通りをもかまわずその手を握つまつた。

清岡は君江が石にでも躓つまいて、そのために急に自分の手を握つまつたとでも思つたらしく、

「どうしたんだ。」と言いながら、往来の人目を憚はばかかつて溝ど際ぎわの方へ少し身を避よけた。

「わたし、今日どうしても休みたいの。電話で断るわ。いいでしょう。」

「断つてどうするんだ。」

「あなたの御用がすむまで、わたしどこかで待つているわ。」

「夜になれば会えるんだから、休むにも及ばないじゃないか。」

「だって、わたし何だか急になまけなくなっちゃったのよ。でも、あなたの御用の邪魔をしちゃわるいわねえ。」

清岡はもともと用事があるのではない。君江の様子を窺いに不意と出て来たので、この場合振切つて別れたなら、浮気な君江の事だから、今夜自分の行くまでに何をしだすか知れないと、つまらない事が妙に気になり出した。

君江の方ではこの年月いろいろな男をあやなした経験で、こういう場合には男がすこしは持て余すほど我儘わがままを言った方がかえつて結果の好い事を知っている。それにまた先刻さつき占いのはなしから清岡の言つた事が何となく気にかかつてならぬ矢先、夜になるのを待たず一刻も早く男の心の打解けるような方法を取らなくてはならないと考えたのである。これも度々の実験で、君江は男がどんなに怒つても結局その場に至れば訳わけもなく悩殺する事ができるものと、あくまで自分の魔力に信頼して安心してゐる所がある。魔力というのは、生れつき君江の肌には一種の温度と体臭とがあつて、別に技巧を弄ろうせずとも一度これに触れた男は終生忘れることの出来ない快感を覚えるという事である。君江はこれまで一人ならず二人ならず、さまざまな男からお前はほんとの妖婦ようふだなどと言われて、自分の肉体はそんなにまで男に強い刺撃しげきを与えるものかと、次第に自覚した後熟練を積み、今で

は自分ながら深く信ずる所があるようになっていた。

四谷駅の降り口近くまで歩いて来た時、君江は急に悲しいような遣瀨やるせのないような表情を見せて、「じゃ、わたし、あんまり我儘をいうとわるいから、ここから円タクで行きますわ。」

「うむ。」とそつけ気なく言ったが、清岡は君江の遣瀨なげな様子に気がつく、その瞬間どうしたのか、昨日きのう今日きょう新あたらに得た恋人と別れるような、何とも知れぬ残り惜しい心持になった。君江はわざとぼんやり清岡の顔を見詰めたまま、日傘ひさきの尖で砂利を突きながら立ちすくんでいる。

清岡は何も彼もか忘れて寄り添い、「いいよ。休んでしまえ。どこでもいい。一緒に行こう。」

「あなた。ほんとウ。」と君江は巧たくみに睫毛の長い眼の中をうるませて徐しずかに俯うつむ向いた。

五

ふかせた府下世田ヶ谷町松陰神社の鳥居前で道路が丁字形に分れている。分れた路を一、二町ほど行くと、茶畠を前にして勝園寺という匾額をかかげた朱塗の門が立っている。路はその辺から阪になり、遙に豪徳寺裏手の杉林と竹藪とを田と畠との彼方に見渡す眺望。世田ヶ谷の町中でもまずこの辺が昔のままの郊外らしく思われる最幽静な処であろう。寺の門前には茶畠を隔てて西洋風の住宅がセメントの門塙をつらねているが、阪を下ると茅葺屋根の農家が四、五軒、いずれも同じような藪垣を結いめぐらしている間に、場所柄からこれは植木屋かとも思われて、摺鉢を伏せた栗の門柱に引違いの戸を建て、新樹の茂りに家の屋根も外からは見えない奥深い一構がある。清岡寓と門の柱に表札が打付けてあるが、それも雨に汚れて明には読み得ない。小説家清岡進の老父熙の隠宅である。

初夏の日かげは真直に門内なる栗や棟の梢に照渡っているので、垣外の路に横たわる若葉の影もまだ短く縮んでいて、鶏の声のみ勇ましくあちこちに聞える真昼時。じみな焦茶の日傘をつぼめて、年の頃は三十近い奥様らしい品のいい婦人が門の戸を明けて内にはいり込んだ。髪は無造作に首筋へ落ちかかるように結び、井の字緋の金紗の袷に、黒一ツ

紋の夏羽織。白い肩掛を引掛けた丈のすらりとした瘦立の姿は、頸の長い目鼻立の鮮な色白の細面と相俟つて、いかにも淋し気に沈着いた様子である。携えていた風呂敷包を持替えて、門の戸をしめると、日の照りつけた路端とはちがつて、静な夏樹の蔭から流れて来る微風に、婦人は吹き乱されるおくれ毛を撫でながら、暫しあたりを見廻した。

麦門冬に縁を取った門内の小径を中にして片側には梅、栗、柿、棗などの果樹が鬱然と生茂り、片側には孟宗竹が林をなしている間から、その筍が勢よく伸びて真青な若竹になりかけ、古い竹の枝からは細い葉がひらひら絶間なく飛び散っている。栗の木には強い匂の花が咲き、柿の若葉は楓にも優つて今が丁度新緑の最も軟かな色を示した時である。樹々の梢から漏れ落ちる日の光が厚い苔の上にきらきらと揺れ動くにつれて、静な風の声は近いところに水の流でもあるような響を伝え、何やら知らぬ小禽の囀りは秋晴の旦に聞く鴟よりも一層勢が好い。

婦人は小禽の声に小砂利を踏む蹠音にも自然と気をつけ、小径に従つて斜に竹林を廻り、此方からは見通されぬ処に立つている古びた平家の玄関前に佇立んだ。玄関には磨硝子の格子戸が引いてあるが、これは後から取付けたものらしく、家はさながら古寺の

庫裏かと思われるほどいかにも堅牢に見える。しかしその太い柱と土台には根継をした痕があつて、屋根の瓦は苔で青く染められている。玄関側の高い窓が開放しになつていたが、寂とした家の内からは何の物音も聞えない。窓の下から黄楊とドウダンとを植交えた生垣が立つていて、庭の方を遮っているが、さし込む日の光に芍薬の花の紅白入り乱れて咲き揃つたのが一際引立つて見えながら、ここもまた寂としていて、花鉢の音も箒の音もしない。唯勝手口につづく軒先の葡萄棚に、今がその花の咲く頃と見えて、虻の群れあつまつて唸る声が独り夏の日の永いことを知らせているばかりである。

「御免下さい。」と肩掛を取りながら、静に格子戸を明けると寂とした奥の間から、「どなたじゃ。」という声が出て、すぐさま襖を明けたのは、真白な眉毛の上まで老眼鏡を釣り上げた主人の照であつた。

「鶴子か。さアお上んなさい。今日は婆やお墓参り。伝助も東京へ使にやつて誰もおらん。」

「それじゃ、丁度よう御在ました。代りに何か御用をいたしましょう。」と婦人は包を持つたまま、老人の後について縁側づたいに敷居際に坐り、

「もう虫干をなさいますの。」

「いつという事はない。手がないから気の向いた時、年中やるよ。年寄の運動には一番いい。」

縁側の半なかほどから奥の八畳の間に書しよちつ帙や書画帖しよがちようなどが曝さらしてある。障子も襖ふすまも明け放してあるので、揚羽あげはの蝶ちようが座敷の中に飛込んで来て、やがてまた庭の方へ飛んで行く。鶴子は風呂敷包ひゃくを膝ひざの上にほどこいて、

「先日のお召物めしものを仕立直してまいりました。あちらへ置いてまいりましょう。ついでにお茶でも入れてまいりましょうか。」

「そう。一杯貫もらいましょう。茶の間に到来物とうらいものの羊羹ようかんか何かあったと思うが、ついでにちよつと見て下さい。」と老人は鶴子が座を立つのを見て縁側に曝した古書を一冊一冊片づけはじめた。五分刈ごぶがりの頭髮は太い眉毛や口髭くちひげと共に雪のように白くなっているので、血色のいい顔色はなお更あか赧あからみ、瘦やせた小づくりの身体からだは年と共にますます豊かくしやく饒かくしやくとしくているように見える。やがて鶴子が番茶と菓子とを持って来たのを見て、老人はそのまま縁先に腰をかけ、

「暫しばらく見えんから風邪かぜでも引いたのかと思つていた。市中では今だにインフルエンザがはやるそうだな。」

「お父さまは去年からお風邪一つお引きになりませんのね。」

「今の若い者とは少し訓練がちがうからな。はははは。その代りふだん丈夫なものはころりと行くからな。当てにはならん。」

「アラ、そんな事をおつしやるもんじやありません。」

「むかしから頼みにならない事を、君、寵頼み難し。老健頼み難しなどというじやないか。はははは。進は相変らず達者か。」

「はい。おかげさまで。」

「その中ちよつと逢いたいと思う事があるのだ。実はこの間偶然電車の中でお宅の御兄さんにお目にかかつてな……。」と老人は言いかけて咳嗽をしながら眼鏡越しに鶴子の顔を見た。鶴子がかえつてさり気なく、

「何か、わたくしの話が出ましたの。」

「そうだ。わるい話ではない。お前の戸籍をこの後どうして置くかというはなしさ。なりはじめの事はもうとやかく言つた処で仕様のない事だからな。成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めずという教もあるから、わしはいずれにしても異存はないと申上げて置いた。お前の家とわしとが承知なら、進は無論何とも言うはずはないわけだから、どうだね。」

早くその手続をしてしまったら、届書は区役所の代書にたのめばすぐ出来るから、印さえ押せばそれでいいのだよ。」

「はい。帰りましたら早速そう申します。」

「戸籍などはどうでもいいようなものだが、しかし人倫じんりんの道は正しに越した事はない。幾年も夫婦同様にしていれば結局籍を入れるのがあたり前のはなしだからな。最初の事は能く知らんが、お宅のはなしではもう五年になるそうだな。」

「はい。たしか。」と鶴子はわざと言葉を濁にごして伏目になった。今更指を折つて数えて見るまでもなく、鶴子は五年前、年齢としは二十三の秋、前の夫が陸軍大学を出て西洋へ留学中、軽井沢かるいざわのホテルで清岡進と道ならぬ恋に陥つたのである。先夫の家は子爵ししやくで、別に資産はなかつたが、とにかく旧華族の家柄なので、世間の耳目を憚はばかり親族は夫の帰朝を待たず多病といひなして鶴子を離別した。鶴子の家にはその時既に両親がなく、惣そうりよう領りようの兄が実業界では相応に名を知られていたところから、衣食に窮しないだけの資産を鶴子に与えて生涯実家や親類の家へ出入する事を禁じた。その時分進はまだ駒込こまごめ千駄木町せんだぎちようにあった老父あきちちの家にいて、文学好きの青年らと同人雑誌を刊行していたのであるが、鶴子が離別されると間もなく父の家を去つて鎌倉に新家庭をつくつた。半年ほどたった時老父の

熙は突然流行感冒で老妻を先立たせ、また文官年限令で帝国大学教授の職を免ぜられたので、これを機会に千駄木の家を人に貸して、以前から別荘にしてあった世田ヶ谷の廃屋に棲せい遅ちした。

世田ヶ谷の家には十年ほど前まで、八十歳で世を去った熙の父玄げん斎さいが隠居していた。

玄斎は維新前駒場こまばにあった徳川幕府の薬園に務めていた本ほん草そうの学者で、著述もあり、専門家の間には名を知られていたもので、維新後しばしば出しゅつ仕しを勧められたが節義を守って

この村そん莊そうに余生を送った。今日庭内に繁茂している草木は皆玄斎が遺愛の形見である。

熙は初め中村敬宇なかむらけいごの同人社に入り後に佐藤さとう牧山ぼくざんと信夫しのぶ恕軒じょけんとの二家について学を

修め、帝国大学を卒業後は直ただちに助教授に挙げられ、老免せられるまで凡およそ三十年漢文の講座

を担当していたのであるが、深く時勢に感ずる所があったと見えて、平素学生に向つては、

今の世の中に漢文学の如き死文字を学ぶほど愚おろかな事はない。唯骨こつ董とうとしてこれを好むも

のが弄もてあそんでいればよいものだと称して、人に意見をきかれても笑って答えず、同僚の教授

連とも深くは交まじわらず、唯自家じかの好む所に従つて専ら老ろう莊そうの学を研究し、著書も少くはな

いのであるが、一として世に示したものはない。熙はその子の進が人妻と密通して世間を

憚はばらず一家を構えたのを知つて、深く憤りはしたものの、現代の青年男女は老人の訓戒な

どに耳を借すはずがないと、あきらめ切っているので、表向は何事も知らぬ振りで、実は義絶したのも同様、世田ヶ谷に隠居してから三年ばかりの間は一度も音信をしたことさえなかった。進の方でも父が平生の気質からその憤りを察して、これに反抗するため、わざとそれなりに月日を過していた。ところが老人は亡妻の命日に駒込の吉祥寺に往つた時、一人の若い女が墓前に花を手向けているのを見て、不審のあまり、丁度狭い垣根の内のことで、女の方から気まりわるそうに辞儀をするまま、その名をきいて始めてその女が倅の妻の鶴子である事を知つたのである。老人は進の如き乖戾な男と好んで苦楽を偕にして、いるような女が、言わばその姑に当るもの忌日を知つて墓参りをするとは、そもそもどうした訳であろう。そんな訳のあらうはずがない。年寄の耳の聞まちがえではないかという気もしたので、墓地の小径を並んで歩む折重ねてその名をきき直した。それが話の糸口になつて、寺の門を出てから電車に乗つて別れる時まで知らず知らず話をしつづけた。老人は平素現代の青年男女には道德の觀念は微塵もない。男は大抵乖戾放慢の徒で、女はまづ禽獣と大差なきものと思込んでいる矢先、鶴子の言葉使いや拳動のしとやかな事がますます不可思議に思われ、更にまた、これほど礼節をもわきまえている女がどうして姦通の罪を犯したのであらうと、家へ帰つた後も頻りに心を労した末、ふと老人は鶴子が操

を破つたのはあるいは放蕩無頼ほうとうぶらいな倅あざむに欺かれたためではないかという気がした。果してそうだとすると、実に気の毒な事だ。何となく親の身として申訳のないような心持がして来るので、その後老人は凶はからず新宿の停車場ていしやばで出会った時は此方こなたから呼びかけたくらいであつた。それらの事から、鶴子はいつともなく世田ヶ谷の隠宅へ出入することを許されるようになったのであるが、しかし進との間柄については、二人とも何やら互たがいに遠慮して、問いもせず言いもせず、そのままになっている。生計の事ではその後進は莫大ぼくだいな収入がある身となつているし、老人の質素な生活は恩給だけでも有り余るほどなので、互に家事向の話の出いずべき所がないわけであつた。

世田ヶ谷の家には庭掃除の下男げなんと雇やと婆いばばがいるものの、鶴子は老人が日々の食事を始め衣類や身のまわりの事に不自由しているらしいのを見て、それとなく陰へ廻つて気のつくかぎり世話をするようになった。表向きお世話をするといえば老人はきつとそれには及ばないと言うにちがいはない。かつまた、清岡の家には既あるに或医学博士に嫁かした姉嬢もあるので、鶴子はその手前をも憚はばつて、何事も目に立たないようにひかえ目めにしている。その態度や心持は月日と共におのずから老人の眼にもわかるようになったので、老人はいよいよ鶴子の胸中を気の毒に思い、心窃ひそかに倅進の如きものの妻にはむしろ過ぎたものと感服

しなければならぬようになった。

老人は茶を飲み干した茶碗ちやわんを膝ひざの上に握りながら、「その中うちお宅へ伺ってお話を伺おうと思つているのだがね、年をとると、つい袴はかまをはくのが面倒でな。そうかといつて、初めて伺うのに着流きながしではあまり失礼だし、何か好い折がと思つているのだが、お前はその後もやはり出入りはせんのかね。」

「はい。そのままになつております。兄ばかりならかえつて遠慮が御在ございませんが、義姉ねの手前も御在ますから。」

「それは大きにそうかも知れない。」

「とにかくわたくしが悪いのにちがいは御在ございませんのですから、別にどなたの事もお怨うらみ申してはおりません。」

「その心持があればもう立派なものだ。」と言つた時、曬さらした古法帖こほうじょうの上に大きな馬うまば蠅えが飛んで来たので、老人は立つて追いながら、「過あやまちを改むるに憚はばかること勿なれ。若い時の事はどうもいたし方がない。人間の善悪はむしろ晩節にあるのだよ。」

鶴子は何か言おうとしたが、自分ながら声が顫ふるえはせぬかと思つてそのまま俯うつむ向くと、胸が急に一杯になつて来て、どうやら眼うろが潤んで来るような心持がした。折好おりよく勝手の方

に人の声があったのを聞付けて、これ幸とあわてて坐を立った。老人は馬蠅の飛び去る方を睨みながら、「酒屋か郵便屋だろう。うっちゃってお置きなさい。」と徐に石摺の古法帖を畳んだ。

鶴子は涙を見せまいと台所へ行つて見ると、老人の言つた通り、酒屋の男が醬油の壇を置いて立去るところであつた。勝手口は葡萄棚のかげになつて日の光も和げられ、竹藪の間から流れて来る風はひやりとするほど爽かである。女中部屋は雇婆が出がけに掃除をして行つたものと見え、火鉢の灰もならしたまま綺麗に片づいている。鶴子は酒屋の男の去つた後あたりにはもう誰もいないと思うと、こらえていた涙が一時に溢れ落るのを急いでハンカチで押えた。この家のお父さまは何も知らずにいらつしやるのであるが、自分と進との間柄は今では名ばかりの夫婦で、入籍するの、しないのというような状態ではない。夫の進は一昨自家を出たなり今夜も多分帰つて来ないであろう。この二、三年原稿の製作を口実にして随意に外泊することはもう珍しくはない。いずれ二、三日すれば帰つて来るであろうが、今のような状況では、自分を正妻にして籍を入れる事をまさか拒みはしまいけれど、さして喜びもしない事は言わずと明である。事によればかえつて迷惑そうな顔をしないとも限らない。と思うと、鶴子は老人の好意をかたじけなく思うに

つけ、その好意を受ける事のできない身の上を省みて涙を催さずにはいられなかったのである。

進と鶴子との恋愛生活は鎌倉に家を借りていた間、わずか一年くらいのものであった。進は一躍して文壇の流行児になり、俄にわかに売文の富を得るようになると、忽たちまち杉原玲子という活動写真の女優に家を持たせるばかりか、絶えず芸者遊びをするようになった。その後玲子が進を捨てて同業の俳優と正式に結婚をすると、進はすぐその代りにカツフェーの女給めかけを妾にするという有様。鶴子は殆ほとんどあきれ返って、嫉妬しつとの情を起すよりも次第に夫の人格に対して底知れぬ絶望の悲しみを抱くようになった。鶴子は女学校に通っていた時から、仏蘭西フランスの老婦人に就ついて語学と礼法の個人教授を受け、また国学者某氏に就いて書法と古典の文学を学んだ事もあったので、結局それらの修養と趣味とがかえって禍わざわいをなし、没趣味な軍人の家庭にはいたたまれなかった。それと共に自分から夫に拮えらんだ文学者清岡進の人物に対しても永く敬愛の情を捧げている事ができなくなったのである。初め軽井沢の教会堂で人から紹介せられた時の進と、今は通俗小説の大家を以て目めせられている進とを比較すると、全く別の人としか思われない。五年前の進は勉学なげうの志を擲なげうたない真率しんそつな無名の文学者であったが、今日こんにちの進は何と云うてよいのやら。思想上の煩悶はんもんなどは少しも

ないらしい様子で、その代り絶えず神経を鋭くして世間の流行に目を着け、営利にのみ汲々としているところは先相場師と興行師とを兼業したとでも言つたらよいかも知れない。新聞に連載しているその小説を見れば、今まで世にありふれた講談や伝奇を現代の口語に書替えたまでの事で、忌憚なく言えば少し読書好きの女の目にさえ、これでは殆ど読むには堪えまいと思われるくらいのものである。鶴子は進が去年の暮あたりから或婦人雑誌に連載し出した小説を見た時、ふと六樹園の『飛弾匠物語』の事を思出して、娘の時分源氏の講義を聞きに行つた国学者の先生が、いつも口癖のように今の文士にくらべると江戸時代の作者がどれだけ優れているか知れないと言つたことなどを夢のように思返した事もあつた。平生家へ出入する進の友人を見れば、言葉使いから様子合いまで、いずれも兄弟かと思われるほど能く似た人ばかりで、二、三人集まればすぐ洋酒を飲み、胡坐をかいたり寐そべつたりして、喧嘩でもするような高調子。その談話は何かと聞けば、競馬の掛けごとに麻雀賭博、友人の悪評、出版屋の盛衰と原稿料の多寡、その他は女に関する卑猥極る話で持切つている。

鶴子は既に幾たびとなく決心して、折があつたら進の家を去ろうと思つていた。今更兄の家の厄介にはなれないので、その当時義絶の証として与えられた金がまだ半分位は銀行

に預けてあるのをたよりに、間借りでもして、何処かの事務員にでも雇われよう時まで、すっかり覚悟をきめて、それとなく最後の破綻の来る時を待っていたが、進の方からはまさか手切金の請求を恐れたわけでもあるまいが、そのままに何事も言わず、表向きはどこまでも令夫人らしく冷に崇め奉っているので、月日のたつにつれて、さすがに女の方から突然別ればなしを持ち出す訳にも行かず、つい言出しそびれて今日に至った。それやこれやの思いに暮れて、鶴子はハンケチを口に銜えたまま台所の柱に身をよせかけ、葡萄棚に集る虻の羽音を聞いていた。

突然人の蹙音がしたので、鶴子はびっくりして様子をつくろうとしたが、眼の縁に残った涙の痕と、憂いに沈んだ顔の色とは俄にどうする事もできない。

老人は鶴子が勝手へ行つたままいつまでも戻つて来ないので、性の好くない行商人でも来たのではないかと、何気なく様子を窺いに来たのである。

「鶴子。心持でもわるいのじゃないか。何なら少しお休みなさい。」

「いいえ。別に。」と言いはしたものの、鶴子は身体の置場にこまって板の間にべったり坐った。

「顔色がよくない。」と老人は既に様子を察したものでらしく、「わしは人から聞いたはな

しは何事によらず他言はしない。むかし細井平洲という先生は人の手紙を見るとその場で焼いてしまったという事だ。心配せん方がよい。」

鶴子はこの時胸にある事は何も彼もこの老人だけには打明けてしまいたい気になって、^{すが}縫るようにその足下に摺寄り、「お話したい事が御在ますの。わたくし、お父さまより外には、お話したいと思ひましても、誰もお話する方が御在ませんから。」

「うむ。聞きます。先刻からどうも様子が変だと思つていた。」と老人は酒屋の男が明放しにして行つた勝手口の硝子戸に心づき、手を伸してそれを閉めた。

「お父さま。あのおはなし。あれはもう、折角の思召しで御在ますけれど、実はもう、なんにもならない事だと存じますから。」と涙を啜つた。

「そうか。家がうまく行つておらんのか。困つたものだ。お前の考はどうだ。この末望みがないのか。」

「今のところ、別にどうという事も御在ませんけれど、籍を入れましても、ほんの名義だけの事で、いづどういう事になるか分りませんから、かえつてこのままの方がよくはないか知らと、そういうような心持もいたします。わたくし、ほんとに我儘な事ばかり申しまして……。」

「いや、それで事情は大抵わかりました。お前に向つて進の事を悪くいっては甚はな氣の毒だが、これは進ばかりには限らん事で、今日文学を弄もてあそぶ青年に物の道理を説いてきかしてもわかるはずはない。わしは長年教師をしていたからそのくらの事はよく知っています。見込みのあるものなら、呼びつけて意見もして見るが、わしはまず駄目だとあきらめてい
る……。」

「わたくしが、何か申上げたようになりましても困りますし……。」

「それは今も言う通り、わしは一切何も言いません。しかしこのままにして置いたら、行末お前が困るでしょう。それが氣の毒だ。」

「いえ。わたくしは、もうどの道、若い身空でも御在ませんから、行先の事は別にそれほど心配してはおりません。長い間には宅の心持もまたどんな事で直らないとも限りませんし……。」

「うむ。うむ。」と老人は立つたまま腕を拱こまねいて嘆声を発したが、裏木戸の方に音のするのを聞きつけ、「伝助が帰つて来たらしい。あつちで話をしましょう。」

老人は手を取らぬばかりに鶴子を急せぎ立てて勝手から立ち去つた。

六

雨は降っているが、小降りでもなく、雲切れのし始めた入梅の空は、まだなかなか暮れきらぬ七時頃。富士見町の待合野田家の門口へ自動車を乗りつけた三人連。一人は清岡の原稿売込方を引受けている駒田弘吉という額の禿げ上った鱧口の五十男に、一人は四十あまり、一人は三十前後の、一見していずれも新聞記者らしい眼鏡をかけた洋服の男である。駒田が先に格子戸を明け、靴をぬぐ間から女中にからかいなながら、どやどやと表二階の広い座敷へ通る。前以て電話が掛けてあったものと見えて、煙草盆に座布団も人の数だけ敷いてあつて、煉香の匂がしている。「お風呂がわいております。」と女中の挨拶に、間もなくこの土地では姉さん株らしい三十近い年増と、二十前後の芸者が現われ、女中の運び上げる料理の皿を卓の上に並べる。

駒田は現在『丸田新聞』に連載せられている清岡の小説がほどなく半月くらいで完結する見込なので、早くも別の新聞社へ交渉して次の原稿を売込む相談をまとめたところから、

編輯長へは内々で割戻しの礼金も渡してしまい、部下の記者は待合に連れて来て酒肴を振舞い芸者をあてがう腹である。

「先生も、もうそろそろお出ででしょう。構いませんから先へやりましょう。」と駒田は盃を年上の記者にさして吸物椀の蓋をとる。

「僕はどうも飲む方は得意でない。」と年上の記者は芸者に酌をさせながら、「まず箱なしの一方というやつだ。」

「恐入りましたね。売ッ児はそれでなくつちやいけません。」

「お前、どこかで見たことがあるな。思出せないが。まさかカツフエーでもあるまい。」

「いいえ。そうかも知れませんが。この頃は芸者が女給さんになったり、女給さんが芸者になったり、全く区別がつきませんからね。」

「芸者から女給になるのはざらだが、カツフエーから芸者になるのは少いだらう。」

「少いこともないわ。随分あつてよ。ねえ。姐さん。」

「そうか。随分いるのか。それは驚いた。」

「そうねえ。五、六人……さがしたらもつといるかも知れないことよ。」

「銀座あたりにいた奴はいないか。」

「辰巳家たつみやからこの間お弘めした児、なんていったつけ……。」「と年増が飲みかけた盃の手を留めて、眉まゆを寄せ、「あの児はたしか銀座にいたんだわね。」

「新橋会館よ。」と若い方の芸者が直すくに答えた。

「新橋会館に。そうか。いつ時分だろう。」と今まで黙っていた若い記者が急に卓を押し出したので、駒田は女中を見返り、

「その芸者を掛ける。おい。名前は何ていうんだ。」

「辰巳家の辰千代さん。」と若い芸者が名ざしをしたので、女中はすぐさま立ちかけた時、下から、「お花さん。お客様がお見えになりました。」

「先生しおとだろう。」と駒田は襖ふすまの方を見返りながら、少し席を譲る間もなく、梯子はしごだん段あに登あ音ねずみがして、パナマ帽を片手に、鼠ねずみセルにじゅうまわしの二重廻にじゅうまわしを着たまま上つて来たのは、清岡進しおとである。

「おそくなつて失礼しました。」と進は年増の芸者に帽子と二重廻を渡し、お召めしのひとえも一重ひとえも物のに重ねた鉄無地てつむじ二重羽織ひとえほおりの紐ひもを結むすび直なしながら、卓の上に小皿と箸はしの置はいてある空席すくさまに坐る。年輩の記者は既に知り合っていると見え、若い記者を紹介したので、直すくさま様茶すくさまぶ台の上で名刺の交換が始まった。女中が芸者の返事と共に銚ちょうし子しを持って来て、

「辰千代さん。すぐ伺います。」

「ほんとに皆さん、あがらないのね。」と年増が新しい銚子を受取って、「あなた。お一ツ。」

「一向景気がつかないようだね。」と清岡は酌をさせながら、駒田を顧み、「まだ後から来るのか。」

「目下おおいに選定中なんですよ。まだ外ほかに知らないか。女給芸者がいるから、ダンサー上りや女優上りもいるだろう。どうせ、呼ぶなら変ったのがいい。」

「こちら、ほんとに物好きねえ。」

「家にもこのあいだまで一人変ったのがいたんだけど、誰がいいか知ら。」

「姐ねえさん、ほら。桐花家さんの。評判じやないこと。」

「ウム。京葉きょうはさん。」と年増は膝ひざを叩たたいて、「あの人ならむしろダンサー以上。逆立さかだちくらいやり兼ねないわ。」

「その代り大変な御面相だろう。」

「ところが綺麗で、色つぼいのよ。何しろこの土地で一番いそがしい人ですもの。」

「いやに宣伝するなア。いくらか貰もらっているな。とにかく呼べ呼べ。」と駒田はすこし酔

い始めたらしく大分元気づいて来たが、清岡は桐花家京葉の名を聞くと共に、去年残暑の頃の一件を想起して厭いやな心持がしたが、この場合よせとも言えないので、素知らぬ顔をしていると、年増の芸者は座談に興を添えるつもりで、

「わたしだって、もう三、四ツ年がわかれば芸者なんぞやめて銀座へ押出しますわ。女給さんの方がとにかく表面うわべだけは素しろうと人なんですからね。何をするにも胡麻ごま化しがききますよ。わたし、つくづくそう思っているのよ。わたしの家のすぐ隣となりが待合さんなのよ。その家へいろいろなお客さまを連れて来る女給さんがあるのよ。家が建込せいんでいるから、窓から首を出せば障子一重で、話はみんな聞えてしまうのよ。身丈せいがすらりとして、身なりは芸者衆よりいい位だから、銀座でもきつと一流のカツフェーでしょうよ。いつでも来るのは朝早いよ。九時前の時もあるわ。それから正午おひるになるかならない中うちお立ちだわ。こっちは九時や十時じややつと眼がさめた時分でしょう。それに今のところ抱かかえはいないし家の内はしんとしているから、つい耳をすまして聞く気になるのよ。」

清岡はだまつて若い方の芸者に酌をさせている。記者は二人ともいかに面白そうに、「うむ、それから、それから。」とあおり立てるので年増も興にまかせて、

「相手のお客様は時々ちがうらしいのよ。だけれど、いつでも君さん君さんというから、

きつと君子さんとか君代さんとかいうんでしようよ。実にすごいものよ。いつだったか感心しちまつた事があるわ。」

清岡は上目うわめづかにじろりと記者の顔を見た。駒田も年を取っているだけ、すぐに気がつき、芸者のはなしがドンフワンの君江の事でなければいいがと心配したらしく、それとなく記者の方を見たが、記者は二人とも案外銀座のカツフェーの事には明あかるくないと見え、別に心当りもない様子で、「感心したというのは一体どういう事なんだ。芸者よりも濃厚だつていうのか。」

「それア勿論もちろんそうよ。まアお聞きなさいよ。虚言うそ見たようなはなしだけれど……。」

駒田はとにかく長く話をさして置いてはいけないと、気転をきかして、「おい。さつき呼んだ芸者はどうした。催促するようにそう言つて来い。」

「はい。」と立上つたのは若い方の芸者なので、駒田は更に、「おれはそろそろ飯をくおう。」

「僕もつき合しましょう。」と酒を飲まない記者が駒田に同意した。御飯の給仕やら番茶の入替いれかえやらで、どうやら年増芸者のはなしも中絶した時、辰千代という女が明けてある襖ふすまの外に手をついた。

年は二十ばかり。つぶしの島田に掛けたすが糸も長目に切り、薄紫うすむらさきに飛模様の裾すそを長々と引いているので、肉付のいい大柄な身は芸者というよりも娼妓しょうぎらしく見られた。

「銀座にいたのはお前か。」

「ええ。そうよ。」と辰千代はむしろ得意らしい調子で、「あつちでお目に掛かったか知ら。何しろわたし眼がわるいんでしょう。だから失礼ばかりしているのよ。」

年増の芸者は辰千代が自分の方には見向きもせず独りでぺらぺらしゃべり続けるのを、さも苦々にがにがしそうに尻目に見返したが、此方こなたは一向気がつかない様子で、さされる盃を立てつづけに二杯干して若い記者に返しながら、「こつちへ来てから一度も銀座の方へ行かないから、きつと変ったでしょうね。今どこが一番賑にぎやかなのか知ら。」

「お前、先に何処どこにいたんだ。コロンビヤか。」

「あら、失礼しちゃうわ。新橋会館よ。」

「どうして芸者になったんだ。あんまり発展しすぎて睨にらまれたんだらう。」

「そう仰おっしゃ有るけれどカツフェーは割に堅いことよ。何しろ昼間から夜の十二時までではちやんとお店にいるんですもの。」

「十二時から先のはなしさ。」

「十二時から先は誰だつて寝るんじゃないの。夜通し起きてはいられないじゃないの。ねえ。あなた。」

その時同じく潰島田に結つた小づくりの年は二十二、三の芸者につづいて、ハイカラに結つた身丈の高い十八、九の芸者が来て末座に坐る。清岡は小づくりの女が京葉だということ、いつぞや市ヶ谷八幡の境内から窃に君江の跡をつけた晩、一生涯忘れるはずのないほどはつきり見覚えている。しかし相手には自分の顔を見知られない方が何かの場合都合がいいと思つて、その後二、三度この土地へあそびに来た時も用心して逢わないようにしていたので、自然横を向いて煙草の烟ばかり吹いていると、駒田は飯をすませて廊下へと立つ。

「駒田さん。ちよいと。」と女中が裏梯子の方へ引張つて行って、「お北姐さん。丁度二本になりますから、もう帰してもよろしいでしょう。」

「後の奴はみんな間に合うのか。」と駒田は時計を見た。

「菊代さんだけ少し高いんですけれど。」

「そんならそれも帰してしまえ。どの道、おれはいらないんだから、三人残して置けばいい。」

「じゃア、京葉さんに、辰千代さんに、松葉さん。」と念を押して、「どういう風にしましょう。」

女中が相方あいかたをきめるのに困っているらしいのを見て、駒田は厠かわやから帳場へ姿をかくし、それから清岡を呼出し、座敷には招待した記者二人を残して好きな芸者をよ振り取らせる事にした。

「そう致しましょう。」と女中はまず年増芸者を帰すように座敷へ行つて見ると、若い記者は女給上りの辰千代を膝の上に載せて窓に腰をかけ外を見ながら、流行唄はやりうたを唄っているので、これはそのままにして、年上の記者に耳打をした。清岡は様子を察して何とつかず立つて厠へ行き、駒田をさがす振りで裏梯子から下へ降りて、再び二階の座敷へ戻つて見ると、記者の姿は二人とも見えず、女中が脱いである洋服の上着と折革包おりかばんとを持ち、立ちかけた京葉に、「三階のすぐ突当り。」と教えているところであった。清岡は何事も気のつかない振りをして、窓の敷居に腰をかけると、一人取残された身丈せいの高いハイカラの芸者は、その場の様子から清岡を自分の出る客と思つたらしく、「もう霽はれたようね。」と言いながら並んで腰をかけた。

雨はいつか歇やんで、両側とも待合つづきの一本道には往来ゆききする足駄あしだの音もやや繁くなり、

遠い曲角まがりかどの方でバイオリンを弾く門附かどつけの流行唄が聞え出した。

「今帰ったお北の家はどこだ。富士見町の方か。」と、清岡は何の訳わけもないような風できいて見た。実は先刻さつきその女のはなしをした隣となりの待合の事が気になつていたのである。

「いいえ、三番町さんばんちょうもずっと先の方……。」

「それじゃ、女学校か何かある、あつちの方か。」

「ええ。そうよ。わたしの家もお北姐さんの家のすぐそばだわ。」

「そうか。お北の家の隣りは待合だつていうじゃないか。」

「ええ。千代田家さんでしょう。先どなりがお北ねえさんの家で、手前の方がわたしのいる家なのよ。」

「そうか。それじゃその家にちがいない。背中せなか合せあわになつてゐる待合がありやアしない

か。」

「何だか変ねえ。」

「義理があるから、今度行こうと思つてゐるんだけど、様子がわからないからさ。」

「あの辺へんでお茶屋さんは千代田家さんだけだわ。何しろ許可地の一番はずれですもの。」

女中が三階から降りて来て、「どうぞ。」と言つたが、清岡はあまりぞつとしない芸者

なので、

「ちよつと用があるんだが、駒田はどうした。まだ帰りやアしまい。」

「先ほどお帳場で旦那とお話していらつしやいました。見て参りましょう。」

女中が立ちかけた時、駒田は上着のかくしへ大きな紙入を差込みながら、表梯子を上つて来た。駒田は商売の取引ならば待合でもカツプエーでも何処へでも出入りするが、自分では滅多に女など買ったことのない男で、新聞社の営業部に勤めていた頃から株相場や家屋地所の売買に手を出し、今では大分身代しんだいをつくり上げたという噂うわさであるが、それにもかかわらず、電車の出来ないむかしから、今以て四谷寺町辺よつやてらまちへんの車さえ這入はいらぬ細い横よこ町ちょうの小家に住んでいる。清岡は駒田の事を爪つめに火をともし流儀の古風な守銭奴しゆせんどだと思つている。

「駒田君。帰るなら一緒に出よう。まだ時間は早いし、どうせ電車だろう。」

「君はこれから銀座へ廻るのかね。」

「イヤ、彼奴あいつはもう止めやだ。君も知つていような始末で、ああ見さかいなしに誰でも御座れじゃ、全く名誉毀損ききそんだからな。すこし相談したい事があるんだ。とにかくぶらぶら出かけよう。」

「アラ、ほんとお帰りなの。」と芸者はさも驚いたような顔をしたが、清岡は見向きもせず、丁度窓際の柱に呼鈴よびりんの紐ひもがついていたのを引寄せて、ボタンを押した。

駒田は清岡と共に表梯子を降りながら、急に思出したらしく、送り出す女中を顧かえりみて、

「おいおい。お泊りのようだったら芸者は明日の朝時間通りに帰してしまえ。」

「それはもう承知しております。」

「別に忘れ物はなかつたな。マッチを貰つて行こう。」と駒田は靴をはきながらも、さすがに抜目ぬけめがない。

「またどうぞ。お近い中うちに。」という声を後に二人は格子戸をあけて外へ出ると、雨あがりの空には月が出ていて、色町の横町はいかにも夏の夜らしく、往来する女の浴衣ゆかたが人の目を牽ひく。

「駒田君。これから、赤坂までつき合わないか。」

「この頃はあの方面ですか。」

「カツフェーももう飽あきたからね。やっぱり芸者が一番いいな。少しピンとしたやつをどうかしよと思うているんだがね。」

「どうかすると言うのは、身受みつけでもしようというはなしですか。それは考かんがえもの物ですよ。」

「君に相談すれば、きつとそう言うだろうと思つていたんだ。」

「まとまった金を出すことはとにかく止よした方がいいですよ。芸者の身受も将来奥さんになれるとか何とかいう目当があれば、女の方もそのつもりで真面目まじめになるでしょうが、そうでなければ、きつと面白くない事が起つて結局お止めやになるんですからな。」

「将来は、僕の方だつてわからない。また一人になるかも知れないし……。」

「そうですか。風雲すうぶん頗急ぶつですな。」

「イヤ、まだそれほどの事でもないんだがね。どういふもんだか、家へ帰ると陰気になつていけない。」

清岡は問われるままに、家の事情を委くわしく語りたいと思ひながら、さてどういふ風に、何からはなし出したらいいものかと考えながら歩いて行く中、忽たちまち富士見町の電車停留場に来てしまった。そもそも清岡には最初から鶴子を正妻に迎えるほどの堅い決心があつたわけではない。唯折々人目を忍んで逢瀬おうせをたのしむくらいに留とどめて置くつもりであつたが、女の方が非常にまじめで、事件が案外重大になつてしまつたので、どうする訳わけにも行かず、幸女さいわいがその兄から金を貰つたのを聞いて鎌倉に家を借りて同棲どうせいしたような次第であつた。勿論人の妻として才色さいしき両ふたつながら非の打ちどころのない事は能よく承知しているが、その後

清岡は月日の立つにつれて自分の品行の修らないところから、何となく面伏な気がしだして、冗談一ツ言うにも気をつけねばならぬような心持がして窮屈でならなくなった。それがため、一日に一度はどうしてもカツフェーか待合に行つて女給か芸者を相手に下らない事を言いながら酒を飲まなければ心淋しくてならないような習慣になった。清岡は女給の君江が最少し乗気にさえなつてくれれば、明日といわず即座にカツフェーなり酒場なり開業させようと思ひながら、そういう相談には君江ではいかにも頼みにならないところから、いつそ方面を転じて、これぞと思う芸者の見つけり次第、芸者家でも出させて見ようかという気になつてゐる。実はそれらの相談もして見たいと思つて、駒田を誘ひ出したのであるが、駒田は電車が近づくのを見ると、早くも折革包を抱え直して、年寄りのくせに飛乗りでもしかねまじき様子。清岡は忽興がさめて、

「それじゃ失礼。僕はちよつと寄るところがあるから。」

「あした。午後は丸田社にいますから、御用があつたら電話をかけて下さい。」と駒田は電車に乗つた。

時計を見ると十時である。清岡はこのまま家へ帰れば、さしておそいというでもなく、丁度ほど好い時間だとは思ひながら、夜ふかきに馴れた身は、何となく物足りない気がし

て、もう一軒どこへか立寄つてからでなくては、どうしても足が家の方へは向かない。しかし今時分、丁度酔客の込合う時刻には、銀座のドンフワンなどへは君江との関係もあるところから、うかうか一人では行かれない。銀座辺の飲食店を徘徊する無頼漢や不良の文士などから脅迫される虞もあり、また君江が酔客を相手に笑い興ずるのを目の前に見ているのも不愉快である。清岡はこれから立寄るべきところは、まずこの間から折々出かける赤阪の待合より外にはないと思ひながら、しかし目ざした芸者は既に五、六度呼んでいるにもかかわらず、今もつてなかなか承知する様子がないので、今夜あたりも大抵話はまとまるまいと思うと、行かない先から、何やらむやみに腹立しい心持になつて来る。しかしこの腹立しさもよくよく考えて見ると、あの芸者が自分の意に従わないという事から発しているのではなくて、その原因はやはり君江に対する平素の憤りから起つている。君江がもし自分の思うようにさえなっていれば、何もあんな芸者にふられるような馬鹿な目に遇わなくてもすむ事だと思つと、一時ゆるがせにしていた報復の悪念がまたしてもむらむらと胸中に湧き立つて来る。清岡が君江に対して、何よりも腹が立つてならないのは、平素君江が何の心配もなく面白そうに日を送っている事で、その次には君江が名声籍々たる文学者の恋人である事をさほど嬉しいとも思つていないように見える事である。もし

自分が關係を断つような事があつても女の方では別に名残惜しいとも何とも思わないように見える事である。君江は自分との關係が断たえればかえつてそれをよい事にして、直すぐさま樣代りの男を見付けて、今と同じように、たわいもなく浮うかうか々と日を送るに相違ない。虚榮と利慾の心に乏しく、唯ちんたい懶惰淫いんしん態な生活のみを欲している女ほど始末にわるいものはない。こういう女を苦しめるには肉体に痛苦を与えるより外には仕様がないかも知れない。といつて、まさかに髪を切つたり、顔に疵きずをつけたりする事もできないとすれば、まず二、三カ月も床につくような重い病氣に罹かかるのを待つより外に仕様がないわけである。そんな事を考えながら足の向く方へとふらふら歩きながら、ふと心づいて行先を見ると、燈火の煌こ々うこうと輝うこういている処は市ヶ谷停車場の入口である。斜ななめに低い堀ほり外そとの町が見え、またもや真暗に曇りかけた入梅の空に仁丹の広告の明滅するのが目についた。

君江の家はあの広告のついたり消えたりしている横町だと思つと、一昨日から今夜へかけてまず三日ほど逢わないのみならず、先刻さつき富士見町で芸者から聞いたはなしも思い出されるがまま、とにかくそつと様子を窺うかがつて置くに若しくはないと思定め、堀端を歩いて、いつもの横町をまがった。

角の酒屋と葉屋の店についている電燈が、通る人の顔も見分けられるほど隈くまなく狭い横

町を照^{てら}している。清岡は去年から丁度一年ほど、四、五日目にはここを通るので、店のものにも必^{かならず}顔を見知られているにちがいないと、俄に眉^{まゆ}深く帽子の鍔^{つば}を引下げ、急いで通り過^{すぎ}ると、その先の駄菓子屋と煙草屋^{たばこや}の店もまだ戸をしめずにいたが、ここは電燈も薄暗く店先には人もいない。路地の入口の肴^{さかなや}屋はもう表の戸を閉めているので、ちよつと前後を見廻し、暗い路地へ進^{すすみ}入ろうとすると、その途端にぱったり行き会ったのは間貸し^{げんじ}の家の老婆である。闇^{やみ}にまぎれて知らぬ振りで行き過ぎようとしたが、老婆は目ざとく、「アラ旦那。」と呼びかけ、「一^{ひとあし}歩ちがいで、まア能^よう御在^{ござい}ました。不用心ですから鍵^{かぎ}をかけて、お湯へ行こうと思つたんですよ。お君さんも今夜はお早いですか。」

「イヤちよつと市ヶ谷まで用事があつたから、寄つて見たんだよ。帰つて来るまで、とても待つてはられないから、今夜寄つたことは黙つていておくれ。また心配するからなア。」

「じゃ、お茶一ツ上つていらつしやいます。」

「でも、おばさん、お湯へ行くんだらう。」

「ナニ、あなた。まだ急がないでもよう御在ます。」

清岡は振切つて去るわけにも行かず、勧められるがまま老婆の寐起^{ねおき}している下座敷に通

り長火鉢の前に坐すわった。座敷は二階と同じく六畳ばかり。壁も天井も煤すすけて、床板ねだも抜けた処ところさえあるらしいが、隅々まで綺麗きれいに片づいていて、障子や襖ふすま紙がみの破れも残らず張つてあるなど、もし借手さえあればここも貸間にするのかとも思われるくらいである。床とこの間まには一度も掛替えたことのないらしい摩利支天まりしてんか何かの掛物がかけてあつて、洗紙しぶがみ色いろに古びた安箆やすだんす筒すの上には小さな仏壇が据えられ、長火鉢にはびかびかに磨いた吉原よしわら五徳ごとくに鉄瓶てつびんがかかっている。こういう道具から老婆の年齢も大方想像がつくであろう。老婆が口ずから語る所によれば、日露戦争の際陸軍中尉であつた良人おととが戦死してから、下女奉公に行つたり派出婦になつたりまた手内職をしたりして、一人の娘を養育したが、その娘は幸いにも資産のある貿易商の妻になり、夫婦とも現在は亜米利加アメリカに居住していて、老婆には不自由のないように仕送りをしていふとの事である。しかし人の噂うわさでは、娘からの仕送りは真実であるが、娘は始め西洋人の妾めかけになり子供が出来てそのまま旦那の本国へ連れられて行つたのだともいふ。いずれが真実やら、清岡は定めかねているのみならず、君江が始めどうしてこの家の二階を借りたのやら、そして何故なぜ、もつと場所柄のいい綺麗な家へ引移らずにいるのやら、その事情もはつきり知ることが出来ないのである。老婆は中尉の妻だつたというが、現在の様子や物の言いざまから見れば、本所ほんじよ浅草辺あさくさへんの路地

裏によく見るような老婆で、生れも育ちも好くない事は、酒屋の通帳がやつと読める位。洋服を着て髻ひげを生はした人をわけもなく尊敬する事などから万事は大抵想像されるのである。清岡はこの老婆に向つて、自分の来ない間君江が何をしているかを、今更きいて見たところで、何の得るところもないだろうと思つていたので、日頃の鬱うつぶん憤などは顔色にも現わさず、努めて機嫌のいい調子をつくり、

「カツフェーへ行くといろいろな人に逢うんで実に困るのだよ。だから夜は前を通つてもなりたけ入らないようにしているのさ。」

「それが能御ようご在まますよ。御身分のある方はい人が目をつけて、何の彼かのと噂をしたがるもんですからね。オヤもう十一時ですね。」と婆ばばは隣となりの時計の鳴る音を聞きつけ、箆へらの上の八角時計を見上げ、

「旦那、もう一時間お待ちになればいいんでしょう。待つてお上げなさいませよ。火鉢に火でもついで置きましょう。」

「おばさん。何も今夜にかぎつた事じゃない。あしたゆつくり来るからさ。」と清岡は敷し島しまの袋ふちを袂たもとに入れたが、婆は最初から清岡が時ならぬ時分この近所を徘徊はいかいしていたらしい様子といい、また日夜見知つている君江のふしだらを思合せて、大抵それと察しな

がら、これもわざと気のつかない振ふりをして、

「それでも旦那、お待たせして置かないと、後あとで君江さんに叱られますから。」

「だまつていれば知れやしない。」

「それでも何だかわたしの気がすみませんからさ。酒屋の電話をかりて掛けて来ましょう

。」と婆は長火鉢の曳出ひきだしをさぐつて、電話番号をかけた紙片かみきれを取り出した。

「それじゃ、とにかく帰るまで二階にごろごろしていよう。十二時には帰つて来るにきまつているんだから、電話なんぞ掛けないでもいいよ。」と清岡は立ちかけて、「お婆さん、留守番をしているから、何なら湯へ行つてお出いで。」

清岡は老婆を銭湯にやり、二階へ上つて、秘密の手紙でもあつたら手に入れようという下心。老婆は前々から不意の事が起つたら電話で知らせるようにと君江からくれぐれも頼まれているので、銭湯への道すがら酒屋か葉屋から電話をかけるつもりで、電話番号の紙片を帯の間にはさみながら出て行つた。

おばさんから電話がかかった時、君江は折よく電話室に近いテーブルのお客と飲んでいたので、呼ばれるが否や、すぐに立って電話を聞いたが、もう三、四十分で店のしまう刻限、大分酔が廻っている上に、あたりの騒々しさに、清岡先生の来ていることだけは通じたけれど、それについておばさんのくどくど言うことは一向に聞取れなかった。とにかく今夜は清岡さんの来べき晩ではなく、かつまた前以て何のたよりさえなかつたところから、君江は安心して既に宵の口に木村義男という洋行帰りの舞踏家とどこへか泊りに行く約束をしてしまった所へ、その後二、三度馴染なじみになった自動車輸入商の矢田さんが来て、カツエーの帰りに春代と百合子の二人をも誘って、松屋呉服店の裏通にこの頃開店した麗々亭れいれいていとかいうおでん屋へ是非とも寄ってくれ。外に約束があるなら一時間でも三十分でもよいからと言って、一度外へ出てから、今いま方がた再び立戻つて来て、四、五人の女給にいろいろな物を食べさせている最中である。これと殆どほとんど前後して、いつもカツエーなどへは来た事のない松崎さんという老紳士が今夜にかぎってひよっくり姿を現した。もつと尤も東京駅へ人を送りに行った帰りだという事である。

銀座通のカツフェーはこのドンフワンに限らず、いずこも十時過ぎてから店のしめ際になつて急に込み合つて来るのが常である。絶間なく鳴りひびく蓄音機の音も、どうかすると搔消されるほど騒しい人の声やら皿の音に加えて、煙草の烟や塵ほこりに、唯さえ頭の痛くなる時分、君江は自分ながらも今夜は少し酔い過ぎたと思つてゐる矢先、目の前には三人の男が落ち合つたのみならず、家の方にも待つてゐるものがあると聞いて、どうしてよいのやら、殆ど途法に暮れてしまった。今夜にかぎつて、どうしてこうも都合が悪るいようになつたのだらうと、自分の身よりも罪のない他人を恨むばかり。一層この場で酔いつぶれてさえしまえば周囲の者が結句どうにか始末をつけてくれるだらうと、君江は松崎老人の卓に来て、

「今夜わたしべろべろに酔つて見たいのよ。オト力を飲まして頂戴。」

「何かいざこざがあるな。お客と喧嘩でもしたのか。」と松崎は年を取つてゐるだけに気がついたらしい。

「いいえ。そうじゃないのよ。だけれど。」

「だけれど。やつぱりそういう訳じゃないかね。」

君江は返事に窮つて黙つてしまつたが、その時ふと、この老人とは女給にならない以前

からの知合しりあいで、身の上の事は何も彼も承知している人だから、内々打明けて相談した方がよいかも知れないと思いついた。折好くテーブルには一人も女給がいないので、君江はびつたり寄添い、

「今夜、わたしこまつてしまったのよ。こんな都合のわるい事は始めてだわ。」

その語調と様子とで、松崎は忽たちまち万事を洞察したらしく、「おれはもうすぐ帰るつもりだよ。今夜は唯カツフェーの景気を見物に来たばかりさ。逢あうのはその中うちゆつくり昼間にしよう。」

「すまないわねえ。あなた、怒らないで頂戴。よくつて。」

「おこるものか。おれにはもう分つている。お客がかち合っているんだらう。」

「さすがに小父おじさんだけあるわねえ。どうして分るんだらう。」と君江は松崎の耳に口を寄せて今夜の始末を包まずに打明け、「何かうまい工夫はないか知ら。」

「いくらでもあるさ。わけはない。」と松崎はすぐに一策を授けた。それは先ますカツフェーの帰り大急行で一人のお客を待合へ連れて行き、どうしても泊るわけには行かないからと、暫しばらくしてから、男が帰り仕度をしない中、お先へ失礼と言ってあわてて帰る振りで、別の座敷へ姿をかくす。その前に極く懇意な友達の女給に頼んで市ヶ谷の家へ寄ってもらい、

問貸しのおばさんに、或^{ある}お客様が自動車で送つてやるからと言うので、何の気もなく一緒に乗つたところ、無理やりに待合へ連れて行かれた。仕様がなから芸者を呼ばせお酒だの御料理だの取らせている間に、自分だけ隙^{すき}を見て逃げ出して来たのだから、急いで君江さんを迎いに行つてくださいと、言うのだ。そうすればきつと清岡が自身でその待合へやつて来るにちがいはない。それまでにたつぷり一時間あまりはかかるから、その間にお客の一人位お前の腕ならどうにでも始末はつけられるはずだ。もう一人のお客には、人目を憚^{はばか}るからと口実を設けて、一人先へ別の家へ行かして、気の毒だが、その方はそれなり寢^ねこかしを喰わしてしまうのだ。勿^{もちろん}論その時はひどく怒るだろうが、怒るほど内心未練が強くなるのにきまつているから、翌日^{かならず}必恨みをいいにやつて来る。その時思うさま嬉しがらしてやれば効果はむしろ平穩無事の時より以上になるだろう。松崎は刈り込んだ半白の口髭^{くちひげ}を撫^なでながら、微笑して、「しかし、こういう仕事をするには、呑込^{のみこみ}の早い、気のきいた家でなくつちやいけない。心安い家でうまい処があるか。」

「そうね。牛込の彼^{あすこ}処はどう。諏訪^{すわちよう}町時分にあなたとも二、三度行つた家さ。この頃三番町にもちよいちよい往^ゆくところがあるのよ。」

その時持番の女給が来たので、君江は取りとめのない冗談を言いながら立つて行つた。

松崎はもう半時間ばかりたてば戸をしめる時間になるので、その間に君江のお客はどんな人か。また君江が果してどういう行動を取るかをも見究めたいような心持もしたが、それまで自分がここに居坐いすわつていてはやりにくかろうと察して、ほどなく勘定を払って外へ出た。両側の商店は既に灯を消し戸を鎖とぎしている。夜肆よみせも宵の中雨うちが降っていたのと、もう時間がおそいので、飲みくいする屋台店が残っているばかり。銀座の大通りは左右のひろい横町もともども見渡すかぎりひっそりしていて、雨気あまけを含んだ闇の空と、湿った路の面おもてに反映するカツフェーや酒場の色電燈が目につくばかりである。劇場や興行物は既に一時間ほど前には閉場しているので、今頃ぶらぶら歩いている男女は悉くカツフェーへ出入するものとしか思われない。通り過る電車は割合にすいていて、辻自動車ばかりが行先の見えぬほど街の角々に徘徊はいかいしている。

松崎は今ではたまにしか銀座へ来る用事がないので、何という事もなく物珍しい心持がして、立止るともなく尾張町おわりちようの四辻よつ辻に佇立たたずんだ。そしてあたりの光景を観望すると、いつもながら今更のようにこの街の変革と時勢の推移とに引きつづいてその身の過去半生の事が思返されるのである。

松崎は法学博士の学位を持ち、もと木挽町こびきちよう辺にあった某省の高等官であったが、一時

世間の耳目を聳動させた疑獄事件に連坐して刑罰を受けた。しかしそれがため出獄の後は生涯遊んで暮らせるだけの私財をつくり、子孫も既に成長し立身の途についているものもある。疑獄事件で収監される時まで幾年間、麴町の屋敷から抱車かかえぐるまで通勤したその当時、毎日目にした銀座通と、震災後も日に日に変わって行く今日の光景とを比較すると、唯夢ただのようだというより外はない。夢のようだというのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思うような深刻な心持をいうのではない。寄席よせの見物人が手品師の技術を見るのと同じような軽い賛称の意を寓くぐするに過ぎない。西洋文明を模倣もほうした都市の光景もここに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。この悲哀は街衢がいくのさまよりもむしろここに生活する女給の境遇について、更に一層痛切に感じられる。君江のような、生れながらにして女子の羞耻しゆうぢと貞操の觀念とを欠いている女は、女給の中には彼一人のみでなく、まだ沢山あるにちがいない。君江は同じ売笑婦でも従来の芸娼妓げいしょうぎとは全く性質を異にしたもので、西洋の都会に蔓延まんえんしている私娼ししょうと同型のものである。ああいう女が東京の市街に現れて来たのも、これを要するに時代の空気からだと思えば時勢の変遷ほど驚くべきものはない。翻ひるがえつて自分の身を省れば、あの当時、法廷に引出されて流職とくしよくの罪を宣告せられながら胸中には別に深く愧はじる心も起らなかつた。これもまた時代の空気のなす所

であつたのかも知れない。月日はそれから二十年あまり過ぎている。一時はあれほど喧しく世の噂に上つたこの親爺が、今日泰然として銀座街頭のカツフェーに飲んでいても、誰一人これを知つて怪しみ咎めるものもない。歲月は功罪ともにこれを忘却の中に葬り去つてしまふ。これこそ誠に夢のようだと言わなければなるまい。松崎は世間に対すると共にまた自分の生涯に対しても同じように半は懐慨し半は冷嘲したいような沈痛な心持になる。そして人間の世は過去も将来もなく唯その日その日の苦樂が存するばかりで、毀譽も褒貶も共に深く意とするには及ばないような気がしてくる。果して然りとすれば、自分の生涯などはまず人間中の最幸福なるものと思わなければならない。年は六十になつてなお病なく、二十の女給を捉えて世を憚らず往々青年の如く相戯れて更に愧る心さえない。この一事だけでもその幸福は遙に王侯に優る所があるだろうと、松崎博士は覚えず声を出して笑おうとした。

*

*

*

*

君江は舞踊家木村義男と牒し合して、カツフェーを出てから有楽橋の暗い河岸通りで

待合せ、自動車で三番町の千代田家という懇意な待合へ行った。そして松崎のおじさんから教えられたように先へ帰る振りをして別の小座敷に姿をかくし、素知らぬ顔で清岡先生を迎えるつもりであったが、車の道すがら話の様子で、君江は木村が案外さばけた男で、女給には恋人の二人や三人あるくらいのは事^{あたりまえ}だと思っ^あているらしいので、千代田家の裏二階へ通ると、すぐさま今夜の始末をそのまま打明けてしまった。すると、木村は案の定どこまでもおとなしく、

「始めから打明けてくれれば、こんな心配をさせなくてもよかったのに。許してくれたまえ。僕がわるかったんだ。その代り今度都合のいい時ゆっくり逢ってくれたまえ。」

木村はわざと追立てるように君江をせき立て、手つだつてその帯まで結んでやった。

君江は始め邦楽座の舞台で活動写真の幕^{まく}間^{あい}に出演する木村の技芸を見た時から例の好奇心に駆られていたので、このまま別れるのが物足りなくてしようがない。木村の技芸というのは彼自身雑誌や新聞などに書いている議論によれば、露^ロ西^シアの舞踊ニジンスキイ以後の芸術と、支那俳優の舞技と、^{すなわち}即東西両種の芸術を渾^{こん}和^わしたとか称するもので、男女両性の肉体的曲線美の動揺は、^{はるか}絵画彫刻の如き静止した造形美術の効果よりも遙に強烈で、また音楽が与える直感的な暗示の力よりも更に深刻だというのであるが、しかし女給さん

の君江にはそういう審美学上の議論はどうでもよい。若い男と女とが裸体になつて衆人の前で時々抱き合いながらさまざまな姿態を示すのを見て、君江はああいう事を商売にしている男と逢つて見たらばどんなだろうと思つたのである。その心持はあばずれた芸者が相撲を鼻^{ひいき}にしたり、また女学生が野球選手を恋するのと変りがない。

「先生。もうおそいから真直^{まっすぐ}にお帰りじやないんでしょう。きつと何処^{どこ}かへお寄りになるのよ。口惜^{くや}しいわねえ。」

「だって、パトロンが来るんじや仕様がな^いじやないか。僕はすぐ家へ帰る。虚言^{うそ}だと思ふなら電話をかけて見給え。」と名刺を渡して、「君江さん。この次きつと逢つてくれるねえ。」

「あなたもよ。きつとよくつて。わたし何だかほんとに濟まないような気がして、お帰ししたくないのよ。」と君江は例の如く新しい男に対する興味を押える事ができないので、既に帰仕度をしかけた木村の膝^{ひざ}によりかかつてその手を握つた。

暫^{しばら}くしてから君江は木村の帰る自動車を頼もうと、女中を呼びに廊下へ出て、時間をきくと今方二時を打つた。そして清岡さんというお客様はまだお見えにもならず、また電話もかからないと言う。自動車が来たので舞踊家の木村先生はお帰りになる。小説家の清岡

先生はそれなり二時半を過ぎてもお出でにならない。君江はカッフェーの仕舞際に瑠璃子こという女給に市ヶ谷へ立寄つて伝言ことづけをするように頼んだのである。瑠璃子はもと洋髪屋の梳手すきてをしている時分から方々の待合へも出入をしていたので、こういう事には抜目のあろうはずがない。事によると、清岡先生は瑠璃子の伝言を聞かない先に怒つて早く帰つてしまったのかも知れない。そう思うと君江は木村を帰すのではなかったものと、いよいよ残り惜しくてたまらなくなつて来た。帯の間に入れた名刺を見ると、その住処、昭和アパートメントの電話番号が記してあるので、前後の考かんがえもなく電話をかけて見ようと裏梯子しごを降りかけた時、表口の方で誰かお客の来たらしい物音がした。清岡先生にちがいないと、君江は耳をすまして表二階へ上る人の声を聞くと、清岡ではなくて、思いもかけない矢田さんらしい。矢田さんにはカッフェーのテーブルで、今夜はいくら誘われても先約があるから裏通りのおでん屋麗々亭へは行かれないがその代り少しおそくなつてからならば、何処へでも行かれるから、行先を教えて先へ行つて待つていて下さいと虚言うそをついて、それなり寐こかしを食わしてしまうつもりであつたのだ。

矢田の方では君江のいう事を真まに受け、最初の晩君江をつれて行った神楽阪裏かぐらざかの待合へ行き、二時過まで待ちあぐんでいたが、電話さえかかつて来ないので、矢田は形勢を察

し、十日ほど前君江がカツフェーの行掛けに自分を連れて行った三番町の千代田家の事を思合せて、万一まぐれ当りにさがし当てたら、腹いせに騒いで邪魔をしてやろうと、突然自動車を乗りつけたのである。門をたたくと直すくさま様女中が雨戸をあけたので、矢田は鎌をかけて君江さんとは聞くと、女中はてつきり君江の待っている旦那だと思込んで、

「奥様は先刻さつきからお待ちかねなんですよ。殿方はほんとに罪だわねえ。」という返事。矢田は烟けむに巻かれて何とも言えず、おとなしく二階へ上り、帽子もとらず床とこの間まを後うしろに胡坐あぐらをかいて不審そうに座敷中を見廻していた。

君江は裏梯子の下で女中から様子をきき、今はどうする事も出来ないと言悟をきめ、いきなり座敷の襖ふすまをあけると共に、

「矢ヤさん。あなた。あんまりだわよ。」と鋭い声で叱りつけた。

矢田は今方女中の返事に驚かされた後、またしても意外な君江の様子に、何とも言わず、目ばかりぱちぱちさせている。

「わたし、もう帰ろうかと思つたのよ。」と君江はきちんと坐つて俯うつむ向いた。

「一体どうしたというんだ。」と矢田は始めて心づいたらしく帽子を取り、「何だか、さっぱり訳わけがわからない。」

君江は俯向いたまま黙つて膝の上にハンケチを弄もてんでいる。女中が上あがり花ばなを運んで来て、「ほんとお待ちになつていらしたんですよ。お銚ちようし子をおつけ致しましょうか。」
 「もう、おそう御在ございますから。」と君江は妙に声を沈ませて、「こんなにおそくまで。ほんとは済みません。」

「おそいのは、もう馴なれております。それでは。どうぞ。」と女中は矢田の帽子と夏外がいと套うを持つて立ちかけるので、矢田はとやかに言うひまもなく、案内されるがまま、先刻舞踊家のいた座敷とも知らず、黙つて裏二階の四畳半に入った。

*

*

*

*

短夜みじかよの明けぎわにぎつと一降ひとふり降つて来た雨の音を夢うつつの中に聞きながら、君江は暫しばらくくうとうとしたかと思うと、忽たちまち窓の下の横よこ町ちようから、急に暑あつくなつたわねえという甲かんだか高たかな女の声と小走りにかけて行く下駄げたの音に目をさました。軒すずめさえずに雀の囀なげる声。やや遠く、稽古けいこ三味線やみせんの音。表の方でばたばた掃除をする戸障子の音と共に、隣となりの屋根に洗濯物でも干しに上るらしい人の登あしおと音がする。雨はすっかり晴れて日が照り輝いていると思

うと、昨夜のままに電燈のついでに閉切つた座敷の中の蒸暑さが一際胸苦しく、我ながら寐臭い匂いに頭が痛くなるようなので、君江は夜具の上から這い出して窓の雨戸を明けようとしたり。矢田は既に昨夜の中わけもなく機嫌を直していた後なので、

「お止しよ。僕があける。実際暑くなつたな。」

「こら。こんなよ。触つて御覧なさい。」と君江は細い赤襟をつけた晒木綿の肌襦袢をぬぎ、窓の敷居に掛けて風にさらすため、四ツ匍いになつて腕を伸す。矢田はその形を眺めて、

「木村舞踊団なんかよりよほど濃艶だ。」

「何が濃艶なの。」

「君江さんの肉体美のことさ。」

君江は知らぬが仏とはよく言ったものだと思いたくなるのをじつと耐えて、「矢さん。あの中に誰かお馴染みがあるんでしよう。みんな好い身体しているわね。女が見てさえそう思うんだから、男が夢中になるのは当然だわねえ。」

「そんな事があるものか。舞台で見るからいいのさ。差向になつたらおはなしにならない。ダンスアやモデルなんていうものは、裸体になるだけが商売なんだから、洒落一つ

わかりやアしない。僕はもう君さん以外の女は誰もいやだ。」

「矢さん。そんなに人を馬鹿にするもんじゃなくつてよ。」

矢田はまじめらしく何か言おうとした時、女中が障子の外から、「もうお目覚めですか。お風呂がわきました。」

「もう十時だ。」と矢田は枕まくらもとの腕時計を引寄せながら、「おれはちよつと店へ行かないくつちやならないんだけれど、君さん、今日は晩おそばん番か。」

「今日は三時出なのよ。暑くつて帰れないから、わたしその時間までここに寐ねているわ。あなたもそうなさいよ。」

「うむ。そうしたいんだけれど。」と考えながら、「とにかく湯へはいろう。」

矢田は自分の店へ電話をかけ、どうしても帰らなければならぬ用事が出来たというので、朝飯も食わず、君江を残して急いで帰って行った。その時はかれこれ十二時近くなっていたが、今だに清岡の様子がわからないので、君江は平素ふだんから頼んである表の肴屋さかなやに電話をかけ、間貸しのおばさんを出して様子をきくと、昨夜お友達ともだちの女給さんが見えて、先生はその女と一緒ににお出かけになつたきりだという返事である。君江は事によると先生と瑠璃子と出来合ったのかも知れない。それでこつちへは姿を見せないのだろうと思つた。

しかし唯ただそう思っただけの事で、君江はそれについてとやかく心を労する気にはならなかった。十七の秋家を出て東京に来てから、この四年間に肌をふれた男の数は何人だか知れないほどであるが、君江は今以つて小説などで見るような恋愛を要求したことがない。従つて嫉妬しつとという感情をもまだ経験した事がないのである。君江は一人の男に深く思込まれて、それがために怒られたり恨まれたりして、面倒な葛かつとう藤を生じたり、または金を貰もらつたために束縛を受けたりするよりも、むしろ相手の老弱美醜を問わず、その場かぎりの気ままな戯れを恣ほしいままにした方が後くされがなくて好いと思つている。十七の暮から二十はたちになる今日が日まで、いつもいつも君江はこの戯れのいそがしさにのみ追われて、深刻な恋愛の真情がどんなものかしみじみ考えて見る暇がない。時たま一人子ぼっねん然と貸間の二階に寝ることがないでもないが、そういう時には何より先に平素の寝不足を補つて置こうという気になる。それと同時に、やがて疲労の恢かいふく復した後おのずから来るべき新しい戯れを予想し始めるので、いかなる深刻な事実も、一旦睡ねむりに陥おちるや否や、その印象は睡眠中に見た夢と同じように影薄く模糊もことしてしまうのである。君江は睡からふと覚めて、いずれが現実、いずれが夢であったかを区別しようとする。その時の情緒と感覚との混淆こんこうほど快いものはないとされている。

この日も君江はこの快感に沈^{ちんめん}湎^{めん}して、転^{うたた}寐^{たね}から目を覚した時、もう午後三時近くと知りながら、なお枕^{あげ}から顔を上げる気がしなかつた。枕もとを見れば、昨夜脱ぎ捨てた着物や、解きすてた帯^{おび}紐^{ひも}に取乱されている裏二階の四畳半は、昨夜舞踊家の木村が帰つた後、輸入商の矢田が来て、今朝方帰りがけに窓の雨戸一枚明けて行つたままで、消し忘れた天井の電燈さえまた昨夜と同じように床の間の壁に挿^さ花^{はな}の影を描いている。懶^{ものう}い稽古唄や物売の声につれて、狭^{ひあわい}間の風が窓から流れ入つて畳の上^なに投げ落した横顔を撫^{なで}る心地好さ。君江は今こういう時、矢田さんでも誰でもないから来てくれればいい。そうすればありとあらゆる身内の慾情を投げかけてやろうものをもと思うと、いよいよ湧^{わき}起^{おこ}る妄想の遣^や瀬^るなさに、君江は軽く瞼^{まぶた}を閉じ、われとわが胸を腕の力かぎり抱きしめながら深い息をついて身もだえした。その時静^{ふすま}に襖^あの明く音がして、屏^{びょうぶ}風の前に立つた男の姿を、誰かで見れば昨夜から名残惜しく思つていた木村義男である。

「あら。」と君江はわずかに顔を擡^{もた}げながら、起直りもせず、仰^{あおむ}向^むきに臥^ねたまま両腕をひろげ、木村が折^{おり}屈^{かが}むのを待つて、ぐつと引寄せながら、「わたし、夢を見ていたのよ。」暫くして後木村は昨夜銀細工の鉛筆を落したから、もしやと思つて捜^{さが}しに来たことを告げた。

二人は起きて、表座敷で料理の肴さかなに箸はしをつけた時、女給の瑠璃子から電話がかかった。瑠璃子は昨夜君江から頼まれた通り、狼狽ろうばいした振りほんむらちようで本村町へ行き、清岡先生に三番町の千代田という家へ行った事を告げると、先生は俄にわかに不快な顔色をして、いろいろ弁解するのも聴かず、途中から自分を振ふりすて捨てどこへか行ってしまった。その事を知らせたいと思つて今まで君江の来るのを待つていたが、三時の出番にも姿が見えないので、最初に肴屋へ呼出しの電話をかけ、おぼさんの返事から推量して、更に電話をかけて見たという事である。

日が暮れて飯を食べてしまうと、木村は明日丸円劇場の初日なので、これから稽古に行かなくてはならないと、急いで仕度をした後、特等の座席券を五、六枚、カツフェーの女給さんたちに売つてくれと頼んで、そのまま晩飯の代も自動車賃も払わずに帰つてしまつた。

君江はまるで落語家はなしかか芸人などと遊んだような気がして、俄きように興が覚め、折角きよう一日夢を見ていたような心持はもう消え失せてしまった。折からたつぷり日が暮れると共に、今のところ何の当もない今夜一晚の事が急に物さびしく思われて来た。女一人では待合にもいられないので、木村の飲み食した勘定を仕払つて外へ出ると、横町は丁度座敷へ出て

行く芸者の行来ゆきぎの一番急いそがしい時分。今頃おくれてカツフェーへも行かれない、といつて、家へ帰つても仕様がなかったので、思出すまま桐花家の京葉をたずねて見ようと、四角よっかどを曲りかけた時、向から座敷着の褌つまを取り、赤い襦袢じゆばんの裾すそを夕風に翻しながら来かかる一人の芸者。見れば京葉である。

「君ちゃん。これから銀座？」

「もう晩おそくなつたから休もうと思つてるの。」

「あなた。千代田家さんにいたんじゃないの。」

「あら。どうして知つてるの。」

「どうしてじゃないことよ。君ちゃん。あすこはいけないよ。昨夜わたし清岡先生にもお目にかかったのよ。」

「あら。そう。」と君江もさすがに目をみはった。

「ゆうべ、宵うちの中に野田家さんでお目にかかったのよ。三、四人お連つれがあつたわ。わたしは後あと口くちで廻つて行つたもんだから、ちよつとお目にかかったばかりなのよ。だから、その時にはどなただか気がつかなかったのよ。だけれど、わたしお連の方に出たもんだから、後ですつかり話をきいてしまったのさ。お前さんがちよいちよ千代田家さんへ行く

ことを能く知っている芸者衆があるんだよ。家が隣合っているものだから、窓からよく見えるんだとき。お座敷でその芸者衆が先生とは知らずにお前さんのはなしをしたんだとさ。何しろ此処じゃはなしができないから、わたし明日かあさって、おばさんにも用があるから、ゆつくり行つて話をするわ。とにかくあすこはよした方がいいよ。」

「そう。そんな事があつたの。じゃ待つてるわよ。」

近処の犬だの、箱屋だの、出前持だの、芸者などが、絶え間なく通過するので、二人は立談もそこそこに右と左へわかれた。

八

良人の起るのは大抵正午近くなので、鶴子は毎朝一人で牛乳に焼麵麩を朝飯に代え、この年月飼馴らした鸚鵡の籠を掃除し、盆栽に水を灌ぎなどした後、髪を結び直し着物をきかえて、良人の起るのを待つのである。その日の朝牛乳と共に女中の持つて来た郵便物の

中に、番地も宛名も洋字で書いた一封があったので、何心なく手に把ると、自分へ宛てたもので、その筆蹟にも見覚がある。女学校を卒業する前後二年あまり教を受けた仏蘭西の婦人マダム、シユールの手紙である。

マダム、シユールは東洋文学研究の泰斗として各国に知られている博士アルフォンス、シユールの夫人で、始め良人に従い支那に遊ぶ事十余年、日本に留ることまた更に数年にして一度本国に帰ったが、その後良人に先立れ孀婦となつた悲しみを慰めるため、单身米國を漫遊して再び日本に来て二年ほど東京にいた。鶴子が女学校の友達二、三人と語學と礼法とを学びに通つたのはこの折であつた。マダム、シユールは巴里で亡夫の遺著を出版するについて至急な用事が出来たので、四、五日前またもや日本に来て、帝国ホテルに投宿したから一度訪ねて来るようにといふのであつた。

鶴子は進の起るのを待ち丁度正午の汽笛が鳴つた頃、電話で聞合せてホテルへ往つた。マダム、シユールは西洋の老女にはよく見るような円顔の福々しく頬の垂れ下つた目の細い肥つた女である。日常の日本語は勿論不自由なく、漢文も少しは読める。『説文』で字を引く事などは現代日本の学生の及ばぬところかも知れない。

丁度食事の頃だったので、マダムは昼餉のテーブルに鶴子を案内して、亡夫の遺著を編

輯んしゅう するについて、第一に社寺または古器物の写真の不足しているのを補うためにこれを買集める事、第二には仏蘭西の本邸たくわに儲えてある東洋の書画しよがさいせき載籍の整理を依頼するたぬ適当な日本人をさがして本国へ同行したいという事を語った。

鶴子はどの位学識があればよいのかと問うと、別に専門の学者を望んでいのではない。譬たとえば和歌と端唄はうたとの区別を知っている位の程度でよいのであるが、学問よりもむしろ日本固有の趣味と鑑識とを具備した人で、かたがた幾分なりと仏蘭西語を知っていれば申分はないのだという。マダムはなお言葉をつづけて、

「半年ぐらいで仕事はすみます。あなたがお一人で遊んでおいででしたら、是非ともお頼みするのですけれど、今ではそんなわけには行きませんから、誰か御存じの方をさがしていただかなければなりません。」

この言葉を聞くと共に、鶴子は食卓を押し出さんばかり、殆ほとんど我を忘れて半身を突き出し、「わたくし、半年や一年ぐらいなら……わたくしのようなものでもお役に立ちますのなら、どんな都合をしても御一緒に参りたいと存じます。」

「あなた。おいでになれますか。」とマダムも驚きと喜びとにその目を見張った。

「一度はどうかして洋行して見たいと思っておりますから。」と鶴子は一時に湧わきおこ起る

感情を見せまいとして努めて声を沈ませた。

鶴子は今朝マダム、シユールの手紙を受取り、このホテルに来て食卓の椅子につく時まで、自分の生涯にかくの如き大変動が起ろうとは夢にだも思っていないかつた。運命ほど測りがたいものはない。鶴子はマダム、シユールの談をきいている中、突然何物かに誘惑せられたように、唯ふらふらと遠いところへ往きたくなつたのである。往つた先の事はよかれあしかれ、鶴子は今住む家の門を出る事が自分の生涯をつくり直す手、始だと日頃から心づいてはいたものの、きようが日までこれを執行する機会がなかつた。一時は深く絶望して何事も皆自分が為した過の報いとのみ思いあきらめ、一日も早く年をとつて、半生の悔いと悲しみを茶のみばなしにする日の来る事を待つより外はないと思つていたが、今突然意外な機会が目の前に現われて来たのを見ては、とかくの思慮を費す暇もない。日頃因循していただけ、障碍が起つたなら、極力これを排斥して思うところを執行しようという元氣さえ出て来たような心持になつた。

食事の後廊下の長椅子に並んで腰をかけ珈琲を啜りながら、懇談することまた一時間ばかり。鶴子はホテルを出て梅雨晴の俄に蒸暑くなつた日盛りをもいとわず、日比谷の四辻から自動車を借つて世田ヶ谷に往き良人の老父をたずねて、洋行のはなしをすると、老

父はかつて大学教授のころ両三度シユール博士に面談した事があるといつて、「あつちへ行つてから書物の事で何かわからない事があつたら遠慮なく手紙で問合せるがよい。」というような次第であつた。鶴子はいよいよ門出の幸あるを喜び、夏の夕陽のまだ照り輝いている中、急いで家へ帰り良人の承諾を求めようと思うと、良人は既に外出した後で、その夜十二時近くなつてからいつものように今夜は晩くなるから先へ寝てくれるようにとの事であつた。仕様がなないので、鶴子はその夜は先に寝て、翌朝は良人の起るまで待つていゝるわけにも行かないところから、マダム、シユールから依頼された用事のある事だけを一筆認めて、再びホテルへ出かけた。マダムは次の日に京都へ行き奈良に遊び、二、三日長崎に滞在して神戸に立戻つて便船を待つつもりであるから、その日までに仕度をしてその地のホテルへ来てくれるようにと、日割を明細に書いて見せてくれた。そして鶴子が旅行免状の事は至急運びがつくように大使館から直接その筋の役所へ交渉してもらおうと手筈だといふ事であつた。

鶴子が良人に逢つて始めて洋行の事を打明けたのは次の夜も世間は既に寝静つた頃であつた。進はどこかで飲んで来た酒の酔も一時に醒めるほど驚いたらしいのを、わざとさり気なく、

「そうか。それは結構だ。行つて来るがいい。」

「半年という約束で御在ますけれど、都合でもっと早く帰りたいと思つております。」

「別に急いで帰るにも及ばない。二度出掛けるのも大変だから、ゆっくり勉強したり見物したりして来る方がいい。」

二人のはなしはそれなり途切れてしまった。進は鶴子が洋行する胸中を推察して今更引留めても既におそいと思つたので、未練らしい様子を見せて、「それ御覧なさい。その位なら平素からもう少し大事にしてくればよいのに。」と思われのが無念である。そうかといつて、「お前のいなくなるのを待つていたのだ。」と思わせるほど冷静な態度を取るのも、かえつて腹の底を見すかされるような気がする。いずれともつかぬ曖昧な態度を取るに若くはない。とそう考えたのは、鶴子の身になつてもやはり同じことであつた。あまり名残を惜しむような様子を見せて、無理に引留められても困るし、といつて、あまり冷淡にして、それがため軽薄無情な女だと思込まれるのは元より好むところでない。夫婦は互に顔色を窺い、できるかぎり真実の事情には触れないようにして、平和に体よくこの場をすましてしまいたいと心掛けたのである。

一週間ばかりの後、鶴子は夕方神戸急行の列車に乗つた。始め進の友人間には送別会を

催すようなはなしが起らないでもなかったが、鶴子は実家へ対して新聞などに自分の名が出るような事はなるべく避けたいからといって固く辞退したので、その夕東京駅まで見送りに行ったものは、良人の進と門生の村岡と、書生の野口という男の外には、鶴子の学友でいずれも相応のところへ嫁しているらしい婦人二、三人だけであつた。実兄は窃ひそかに旅費を贈つてもいいといったほど好意を持っていたが、世間を憚はばかつて見送りに行かず、世田ヶ谷の老人もまた頽たいれい齡れいをいいわけにして出て来なかつた。

列車が発車すると、進を始め男二人と婦人たちとは自然別々になつてプラットホームを降口の方へと歩みはじめたが、村岡一人はいつまでも帽子を片手に列車の行衛ゆくえを見送つたまま立っている。進は見返りながら、

「おい。村岡。何をぼんやりしているのだ。」

「実にさびしい出発でしたな。」と村岡は既に人影のなくなったプラットホームを見廻しながら初めて歩み出した。

「彼の女の生活もこれで第一篇の終を告げたのだ。」と進は吸いかけの巻煙草を線路の方へ投捨なてた。

「でも、半年たてばお帰りになるんでしょう。」

「いずれ帰るだろう。しかし恐らく僕の家へは帰って来ないだろう。」

「先生。僕も実はそういう気がしたんです。一種の暗示ですね。」

「おい。村岡。君はどうして彼女のツバメにならなかつたんだ。おれには能くわかつていた。彼女は君のような感傷的な比較的純情な青年を要求していたんだぜ。」

村岡はまだ三十にはならない青年なので、顔を真赤にして、「先生。そんな冗談を。うそですよ。そんな事は。」

「ははははは。帰って来てからでも遅くはあるまい。」と進は始めて面白そうに笑った。

改札口へ来かかると俄に混雑する人の往来に、談話もそのまま、三人は停車場の外へ出た。吹きすさむ梅雨晴の夜風は肌寒いほど冷である。

「おい。野口。まだ早いから活動でも見て帰るがいい。ここに招待券があるから。」と進は書生を遠ざけてから、村岡と連立って丸ビル下の往来をぶらぶら当てもなく歩いて行く。村岡は突然思出したように、

「先生。ドンフワンはあれツきりなんですか。」

「うむ。すこし考えていることもあるから。」

「どんな事です。」

「さア、別にまだはつきりした考もないんだがね。しかし君にはもう心配させないつもりだから、それだけは安心してたまえ。君はあんまり善人過るから。」

「そうでしようか。」

「どうかすると、まるで田舎の老人見たような事を言うからな。」

「それでも、僕には君江さんはそんなに憎むべき女だとは思われないですよ。」

「君は傍観者だからさ。僕だつてそれほど深く憎んでいるわけでもない。唯癩しやくにさわるんだ。復讐ふくしゅうだとか報復だとかいうほど深い意味じゃない。唯すこしいじめてやろうと思つているんだ。僕の考えている事をはなしたら、君はきつと残酷だとか人道にはずれているとか言うにちがいない。」

「どんな事です。」

「君を信用しないわけではないが、今話をするわけには行かない。」

「警察へ密告でもするとうんですか。」

「ばかな。そんな事をしたつて、あいつは何とも思やしない。拘留された所で二、三日たつて出て来る。女給でなくつてもあいつのする事はまだ沢山ある。僕はあいつが何もする事ができなくなるようにしてやりたいと思つているんだ。それもおれが自身に手を下さず

に、自然に他の人が手を下すような、そういう機会をつくらせようと思っ
 ては。これは僕の空想だよ。イヤ、僕はこういう男の心理状態を小説に
 して見たいとこの間から苦心しているんだ。たしかバルザックの小説に
 あつたはなしだと思う。欺かれた男が密夫みつぶの隠れた戸棚を密閉して壁を塗
 って、その前で姦婦かんぶと酒を飲むはなしがある。僕の空想したのは、
 ……僕の書こうと思っ
 ているのは、女を裸体にして自動車から銀座通のよう
 な町の上に投り出してやりたい。日比谷公園ひびやの木の上に縛りつけて置くのも
 面白い。昔は不義の男女を罰するために日本橋にほんばしの袂たもとに晒さらし者にして置いた。
 それと同じような事さ。どうだろう。今の読者には受け
 ないか知ら。」

村岡は進が真実小説の腹案を語るのやら、または戯たわむれに自分をからかうのやら、あるいは
 また小説に托して君江に対する報復の手段をそれとなく語るのやら、その区別がつかない。
 唯何となく薄気味がわるく、総毛立つような気がするばかり。やっと気を取直して、

「いいでしょう。甘つたるい場面にはもう飽あきている時ですから。」

「女が恋人と寝ている処へ放火するのも面白いだろう。乱れた姿で外へ逃げ出すところを、
 火事場騒ぎにまぎれて女をつかまえ、どこか知らない処へつれて行って思うさま侮辱を与
 える……。」

「なるほど……。」

「まだ考えている事がある……。」

「先生。もう止してください。何だか変な心持になるから、もう止してください。」

「暴風あらしになりそうだな。今夜は。」

空は真暗まつくらに曇くもって、今にも雨が降ふって来こそうに思おもわれながら、烈風れつぷうに吹きちぎられた乱雲らんうんの間から星影せいえいが見みえてはまた隠かくれてしまう。路傍ろぼうの新樹しんじゆは風にもまれ、軟やわらかなその若葉わがはは吹き裂さかれて路みちの面おもてに散乱さんらんしている。唯たださえ夜よになれば人通りひとどおりの絶たぎがちな丸まるの内の道路だうぢゆは、この風かぜとこの闇やみとに一際ひととき物寂ものさびしく、屹きつりつ立たする建物たてものの間の小路こうじから突然とつぜん追剥おいはぎでも出て来こはせぬかと思おもわれるような気がする。

「帝劇ていげきの女優じゆうが楽屋がくごから帰り道かへりみちに、車くるまから引ひずりおろされて脚あしを斬きられたことがあつた。犯人はんじんはわからずじまいだ。」

「そうですか。そんな事があつたんですか。」

「寝ねている中に黴菌ばいきんをなすりつけられて盲目まぶさになつた芸者げいしやもある。君江きんえのような女おんなは最後さいごにはきつとそういう目に遇あうだろう……。」

突然進とつぜんがアツと叫こゑんだので、村岡むらおかはびっくりして寄添よそうと、横合よこあから吹ふつける風かぜに、進ま

は高価なパナマ帽子を奪い去られたのであった。

知らず知らず日にちにち々新聞社の近くまで歩いて来たので、二人はやや疲れたままその辺の小さなカツフェーに小憩こやすみして、進はウイスキー村岡はビール一杯を傾け、足の向くまま銀座通へ出た。村岡は別れて帰ろうとするのを清岡は無理に引留め、今夜は顔を見知られていない裏通のカツフェーを観察しようと言出して、つづけざまに五、六軒飲みあるいた。どの店へ入つても四、五盃はいずつウイスキーばかり飲みつづけるので、いつも強酒の清岡も今夜は足元が大分危くなつた。それにもかまわずまたしても通りすがりのカツフェーへ這は入ろうとするので、村岡は清岡が羽織の袖そでを捉とらえながら、

「先生。もう止しましょう。カツフェーよりか、どこか外の処へつれて行って下さい。僕はもうくたびれてしまいました。」

「一体何時だ。」

「もう十二時です。」

「もうそんな時間か。」

「だから、もうカツフェーはつまりません。」と村岡はとにかく酔つて清岡がこの辺を徘徊はいかいしている事を危険に思い、それよりもどこぞの待合へでも上つた方がまだしも安全だ

と考えて、「先生。もつとゆつくりした処で静に飲み直しましょうよ。」

「うむ。君もなかなか話せるようになった。何処どこでもいい。好きなどころへ連れて行け。」

「じゃ、先生、車に乗りましょう。」と村岡は早速清岡の袖を引張って、土橋どばしへ通ずる西銀座の新道路へ出ようとした。

「待て待て。」と清岡は真暗な建物の壁に向つて立小便をしはじめたので、村岡は少し離れて曲角まがりかどに立留つた時、女給らしい女が三人つれ立って、摺すれちがいに通りかかったのをふと見ると、その中の一人はドンフワンの君江である。君江の方でも村岡の顔を見て、アラとかオヤとか言つたらしかなかったが、その声はまだ吹きやまぬ烈風に吹き去られて聞えなかつた。村岡は咄嗟とつさの間に、先刻丸さつきの内を歩きながら清岡が言つた事を思出し、何とも知れぬ恐怖を感じて、首と手を振って早く行けと知らせた。いつになく乱酔した清岡が、
人ひと通とおりのないこの裏通の角で突然君江の姿を見たら、何をしだすか知れない。新聞紙を賑にぎわすような騒ぎを引起しては大変だと心配したのである。

君江は村岡の心を察したのか、どうか分らぬが、そのまま通り過ぎて、三人連づれで向側の蕎麦屋そばやへ這入りはいかけた時、丁度長小便をし終つた清岡はひよろひよると歩み出で、向むを眺めながら、「どこの女給だ。おれが行つておごつてやろう。」

村岡は驚いて袖にすがり、「およしなさい。変な男がついているようです。」

「かまうものか。おごつてやるんだ。」

「先生。およしなさい。」と村岡は力のかぎり抱き留めながら、通り過る円タクを呼留めた。この騒ぎに気がつかずにいたが、風に交つていつの間にもやら霧雨が降り出して見えた。村岡は車に乗つてから窓の硝子の濡れているのに心づいた。

* * * * *

蕎麦屋を出てから自動車に乗つたのは瑠璃子、春代、君江の三人であつた。瑠璃子が赤阪一ツ木で先に降り、次に春代が四谷左門町で降りると、運転手は予め行先を教えられているので、塩町の電車通から曲つて津の守阪を降りかけた。小雨のふり出した深夜のことで人通はない。君江は酔つているので、一人になると急に眠くなつて覚えず瞼を合せたかと思うと、突然君子さんと呼ぶ男の声。びっくりして気がつくとき自分と呼んだのは見も知らぬ運転手である。いやな奴だと思ひながら、大方女給同士の話から聞知つて冗談を言うのだらうと、気にも留めず、「もう本村町なの。」

運転手はゆるゆる車を進めながら、「初めから君子さんにちがいないと思つていたんですよ。忘れましたか。諏訪町の加藤さんで二、三度お逢いしました。」と鳥打帽とりうちぼうをとり振返つて顔を見せた。

諏訪町の加藤というのは今富士見町に出ている京葉の事なので、君江はそこで知つていふというからには二度や三度出たお客にちがいないと思ひながら、その顔はどうに忘れ果てて思ひ出せない。日頃君江はカツフェーひとなかの人ひとなかの中で、もしその時分のお客と顔を見合せた場合、自分の取るべき態度については予め考えていないことはなかつた。しかし東京はさすがに広いもので、半年近くも稼ぎ廻つていたにもかかわらず、銀座のカツフェーへ出てから今日まで一人もその時分のお客には出逢わなかつたので、月日と共に一時の用心もおのずからゆるが忘れになつた時、今夜突然、自分の乗つてゐる車の運転手から呼び掛けられ、君江はさすがにびつくりはしたものの、知らぬ顔で押通すに若くはないと思定め、

「人ちがいでしょう。知らないわ。わたし。」

「君子さんの方じゃ、お忘れになるのも無理はありませんよ。円タクの運転手にまでなり下つてゐる始末だから。しかし君子さん女給になつたからつて、何もそうお高くとまるには及ばないでしょう。女給も高等も内実においては変りはないでしょう。」

「下^{おろ}してよ。ここでいいから。」

「雨が降っています。お宅までは是非送らせて下さいな。」

「いいのよ。迷惑よ。」

「君子さん。あの時分は十円だったね。」

「下せつていうのに、何故下さないんだよ。男が怖くつて夜道が歩けるかい。馬鹿ツ。」

君江の威勢に運転手は暴力を出しても駄目だと思つたのか、そのままおとなしく車を駐^とめると、折からざつと吹ツ掛けて来た驟^{しゅうう}雨に傘の用意のないのを、さも好^いい気味だといわぬばかり。手を伸^のびして内から戸を明け、

「ここでいいなら。お下りなさい。」

「一円ここへ置きますよ。」と君江は五拾銭銀貨二枚を腰掛の上に投出して、戸口から降りようとするその片脚が、地につくかつかぬ瞬間を窺^{うかが}い、運転手は突然急速力で車を進めたので、君江はアツと一声。でんぐり返しを打つて雨の中に投げ出された。

「ざまア見ろ。淫^{いんばい}売^め。」と冷罵^{れいば}した運転手の声も驟雨の音に打消され、車は忽^{たちま}ち行衛^{ゆくえ}をくらましてしまった。

君江は気がついて泥^{どろ}の中に起直つて、あたりを見ると、投出された場所は津の守阪下か

ら阪町下の巡查派出所へ来る間の真暗な道だと思いの外、まるで方角のわからない屋敷町の塀外であつた。自動車も通らなければ無論人影もない。足を曳摺りながら、石の門柱についている灯の下に歩み寄り、塀外へ枝を伸した椎の葉かげをせめての雨やどりに、君江はまず泥と雨とに濡れくずれた髪の毛を束ね直そうと、額を撫でながらその手を見ると、べつたり血がついている。君江は顔の血に心づくつと俄に胸がどきどき鳴出して、髪や着物にかまつている気力は失せ、声を出して救いを呼ぼうとしたのをわずかに我慢して、唯一心に医者か薬屋かを目当に雨の中を馳け出した。

九

いち市ヶ谷合羽阪を上つた薬王寺前町の通に開業している医者が、応急の手当をしてくれた上に、自動車まで頼んでくれたので、君江は雨の夜もいつか明くなりかけた頃、本村町の貸間へ帰つて来た。顔と手足との疵はさほどの事もなかつたが、長い間着のみ

着のままぐつすり雨に濡ぬれていたもので、夜明から体温は次第に昇せつて摂氏四十度を越え、夕方になつても一向下りそうもない容態に、医者は窒扶チブス斯か、肺炎でも起きなければよいがと、貸間の老婆にも注意して行つたが、幸さいわいにしてそれほどのもなく、三日目には入院の沙汰さたも止み、一週間目には布団ふとんの上に起き直つてもいいようになった。

君江は事実を知らせると、大勢見舞いに來るのが煩うるさいのみならず、強姦ごうかんの噂うわさが立たないとも限らないと思つて、カツフェーへは唯風邪ただかぜをひいたことにして置いたのである。

八日目の午後になつて、春代が初めて見舞に來たが、その時には額の繃帶ほうたいは既に除かれていたので、疵あとの痕はその晩路地ろじで転んだことにいまぎらしてしまつた。次の日には瑠璃子が來たが、これも風邪の重いのに罹かかつたのだとばかり思い込んで歸つた。体温は既に平生に復し食慾もついて來たが、腰や手足の打身うちみはまだ直らず、梯子段はしごだんの上り下りにもどうかすると痛みを覚えるくらいである。間貸の婆ばばは市ヶ谷見附内みつけの何とやらしい薬湯やくとうがいいといふので、君江はその日の暮方始めて教えられた風呂屋ふろやへ行き、翌日はとにかく無理をしても髪を結ゆおうと思ひさだめた。

湯から歸つて來ると、郵便が届といている。状袋には署名がないが、読んで行く中に清岡の門人村岡の手紙である事がわかつた。

「私は直接あなたに手紙を上げていいかどうかを一度考えた後にこの手紙を書きました。何故なげなれば、先生がこれを知ったなら、先生と私との今までの関係は必断滅かならずするだろうと思つたからです。私はしかしながらあなたが十分に秘密を守って下さるだけの好意を私のために持つていられる事を信じて、そして私はこの手紙をかきました。あなたは御存じかどうか知りませんが、先生の令夫人は突然先月の末に或外国あるの婦人と一緒に日本を去られました。先生はこの別離については何らの感激をも催さないように粧よそおつておられますが、しかし現われたる事実が凡すべてを打消してきます。その後十日ばかりの間における先生の生活は飲酒と放蕩ほうとうとのために俄にわかにすさんで行きかけています。この場合、現在とそして将来における先生の生涯を慰める力のあるものは、君江さん、あなたの愛より外にはないものと私は信じています。尤も先生はあなたの名をさえ今では私たちの前では発音することを避けていられます。避けていられるだけ、それだけ、私は先生の心の底にあなたの事がまだ眞実消去きえさらずにいるものと推察するのです。先生は令夫人を失つた原因をあるいはあなた一人の上に塗りつけようとしているのではないかと疑われることがある位です。私は去年からの凡ての秘密をあなたに打明けなければなりません。私はあなたに向つて、先生の心の底に去年から絶えず蠢うごめいている報復の企くわだてをお知らせする事を敢あえてするのは、あ

なたと先生との間を遠くさせるためではなくて、かえって先生がかくの如き残忍性を感じたほど、いかにあなたを愛しつつあるかを、私はあなたに向ってお知らせしたい誠実さからなのです。先生は二、三日中に丸丸発行所主催の文芸講演会で講演をされるため仙台から青森の方面へ旅行されます。今年の夏はどこか東北の温泉場で避暑するといわれるので、私もこれを機会に、久しく郷里の地を踏みませんから、先生をお見送りしてから暫く東京を去るつもりでいます。その前に一度お逢いしたいと思つて、実は昨日一人でドンフワンへ行つて見ました。そしてあなたが御病気で寝ておいでだという事を聞いたのです。私はむしろあなたがこの数日間病氣のために外出されなかつた事を祝福しなければなりません。私は唯それだけを言うに止めて置きます。その理由を明言する事を躊躇してると言つたら、あなたは直に凡てをお察しなさるだろうと思ひます。それでは、今年の秋風が丈の高くなつたコスモスの莖をゆり動す頃まで、私は田舎に行つていましょう。夜の涼しさに銀座の賑いが復活する時分、またお目にかかるのを楽しみにしていきましょう。七月四日。

君江は手紙の日附を見て、初めて七月になつたのに心づいたような気がした。それと共に、わずか十日とはたたぬ先夜の事がもう一月も二月も前のような気がして、それ以来長

らく枕まくらについでいたような心持もした。とにかく一年あまり毎日通かよひな馴れたカツプエーへ行かない事だけでも、境遇が一変してしまったような心持がするの、時節も丁度その日入梅うめがあけて、空はからりと晴れ昼の中うちは涼風が吹き通っていたが夕方からぱったり歇やみ、坐すわつていても油汗が出るような蒸暑い夜になった。小家の建込んだ路地裏は昨日までの梅雨中の静けさとは変つて、人の話声やら内職のミシンの響などが俄に騒々しく聞え始め、路地の外の裏通にもラジオを始め、何という事なくいろいろな物音がしている。君江はおばさんに呼ばれて下へ行き夕飯をすまずと、洗あら髪がみのまま薄化粧もそこそこに路地を出た。家にいると毎晩のようにおばさんに話し込まれるのがうるさいのみならず、俄に真夏らしくなつたあたりの様子に、唯何ともつかず散歩したくなつたからである。出しでなに鏡台ひきだの曳出しから墓がまぐち口を取出す時、村岡の手紙が目に触れたまま一緒に帯の間に挿さしこ込んだ。半分から先は夕飯に呼ばれたのと夜になりかけた窓の薄暗さに拾い読みをしたばかりなので、君江はぶらぶら堀端ほりばたを歩みながら、どこか静どてぎわな土手際で電燈の光あかるの明い処でもあつたらもう一度読み直そうという気もしたのである。しかし電車と自動車の往復する堀端は、新見附しんみつけの土手へ来るまでは手紙を読返す事のできるような処もなかつた。行手に牛込うしごめ見附の貸ボートの灯ひが見え、二、三人女学生風の女が見附の柵さくに腰をかけて涼んでいたの

で、君江は蔦の葉つなぎの浴衣ゆかたのさして目にたたぬを好い事に、少し離れた処に佇立たたずんで、束ねた洗髪を風に吹かせながら、街燈の光に手紙を開いて見た。君江には手紙の文体が学生えんしよの艶書と同じように気障きざにも思われるし、また翻訳小説でも読むようにまわりくどくて、どうやら気味のわるい気はしながらも、事実と文飾との境がはつきりしないのである。君江は手紙の意味を手短てみじかに言つてしまえば、清岡先生はわたしを二号同様にしていたために奥さんに逃げられたのだから、そのつもりでどうかしなければいけない。このまま知らない顔をしていれば、清岡先生はやけ半分、何か仕返しをしないと限定するまい。どうか、そういう事のないように気をつけてくれというような事になると考えた。そして随分訳わけのわからない無理な事を言う人だと腹立しい心持になった。

君江は暫しばらくしてこの手紙は村岡の心から出たものではなく、内々清岡さんに言われて書いたものではないかと、気がついて見ると、あの晩西銀座の蕎麦屋そばやへ這入りはいがけ、意外な処で村岡に出逢であつた時の様子から思合せて、自分が車から突落されたのも、事によると清岡さんの教唆きょうそから起つた事かも知れない。君江は突然襟首に寒さを覚えるような恐怖と共に、ナニ、先が先ならこつちもこつちで負けているものか。どうでも勝手にするがいいというような心持になった。

あまりいつまでも同じところに立つてもいられないので、君江は考え考え見附を越える
と、公園になつて四番町の土手際に出たまま、電燈の下のベンチを見付けて腰をかけた。
いつもその辺の夜学校から出て来て通り過る女にからかう学生もいないのは、大方
日曜日か何かの故であろう。金網の垣を張った土手の真下と、水を隔てた堀端の道には
電車が絶えず往復しているが、その響の途絶える折々、暗い水面から貸ボートの静な櫂の
音に雜つて若い女の声が聞える。君江は毎年夏になつて、貸ボートが夜ごとに賑かになる
のを見ると、いつもきまつて、京子の囲われていた小石川の家へ同居した当時の事を憶
い出す。京子と二人で、岸の灯のとどかない水の真中までボートを漕ぎ出し、男ばかり乗
つてゐるボートにわざと突当つて、それを手がかりに誘惑して見た事も幾度だか知れな
かつた。それから今日まで三、四年の間、誰にも語ることでできない淫恣な生涯の種々様々
なる活劇は、丁度現在目の前に横つてゐる飯田橋から市ヶ谷見附に至る堀端一帯の眺望
をいつもその背景にして進展してゐた。と思うと、何というわけもなくこの芝居の序幕も、
どうやら自然と終りに近づいて来たような気がして来る……。

火取虫が礫のように顔を掠めて飛去つたのに驚かされて、空想から覚めると、君江は
牛込から小石川へかけて眼前に見渡す眺望が急に何というわけもなく懐しくなつた。いつ

見納めみおさになつても名残惜しい気がしないように、そして永く記憶から消失きえうせしないように、能く見覚えて置きたいような心持になり、ベンチから立上つて金網を張つた垣際へ進寄すすみよろうとした。その時、影のようにふらふらと樹蔭こかげから現れ出た男に危あやうく突き当ろうとして、互に身を避けながらふと顔を見合せ、

「や、君子さん。」

「おじさん。どうなすつて。」と二人ともびつくりしてそのまま立止つた。おじさんというのは牛込芸者の京子を身受して牛天神うしてんじん下に困かこつていた旦那だんなの事である。君江は親の家を去つて京子の許に身を寄せた時分、絶えず遊びに来る芸者たちがおじさんおじさんというのをまねて、同じようにおじさんと呼んでいた。本名は川島金之助といつて或会社あるの株式係をしていたが遣い込みの悪事が露あらわれて懲役に行つたのである。その時分は結城ゆうぎずくめの凝こつた身なりに芸人らしく見えた事もあつたのが、今は帽子もかぶらず、洗ざらした手拭地てぬぐいじの浴衣ゆかたに兵児帯へこおびをしめ素足に安下駄をはいた様子。どうやら出獄してまだ間がないらしいようにも思われた。

川島は手拭浴衣の襟を寒そうに引合せ、「このざまじゃア、どうもこうもあつたものじやない。むかしはむかし今は今だ。」と取つて付けたように笑いながらも、絶えずそれと

なく四辺あたりに気を配っているらしく、何とつかずそわそわしている。年はその時分既に四十、五、六になつていたが、白髪もさして目につかず、中肉ちゆうぜい中ちゆうぜい丈うしろすがたの後うしろすがた姿うしろすがたは、若い妾めかけとつれ立つて散歩に出かける時などは、随分様子がいい血氣盛の男に見まがうほどであつたが、今見れば、妙に黄ばんだ顔一面、えぐつたような深い皺しわがで、蓬ほうほう々とした髪の毛の白くなつたさまは灰か砂でも浴びたように爺じじむさく、以前ばつちりしていただけ、落おちく窪ぼんだ眼は薄氣味のわるいほどぎよろりとして、何か物でも見詰めるように輝いている。「その時分はいろいろ御世話おせわになりました。」と君江は挨拶あいさつにこまつて、思出したように礼を述べた。

「やっぱりこの辺にゐるのかい。」

「市ヶ谷の本村町にあります。」

「そう。じゃ、またその中、どこかで逢あうだろう。」とそのまま行きかけるので、君江は住処だけでも聞いて置きたいと思つて、二歩ふたあし三歩あし一緒に歩きながら、

「おじさん。京子さんにお逢いになつて。わたしその後はしばらく逢いません。」と鎌を掛けて見た。

「そうか。富士見町に出ているそうじゃないか。噂うわさはきいているけれど、このざまじゃア

行つたところで、寄せつけまいから、いつそ逢わない方がいい。」

「あら、そんな事はありませんわ。逢つてお上げなさいましょ。」

「君子さんの方はその後どうしているんだね。定めし好きな人ができて一緒に暮しているんだろう。」

「いいえ。おじさん。相変らずなのよ。とうとう女給になつてしまつたのよ。病気でこの一週間ばかり休んでいますけれど。」

「そうか。女給さんか。」

話しながら歩いて行く中、川島は木蔭こかげのベンチには若い男女の寄添よきぞっている他ほかには、人通りといつても大抵それと同じような学生らしいものばかりなので、いくらか安心したらしく、自分から先に有合あひあうベンチに腰をおろし、「いろいろききたい事もあるんだ。君子さんの顔を見ると、やつぱりいろいろな事を思出すよ。むかしの事はさつぱり忘れてしまふつもりでいたんだが……。」

「おじさん。わたしも今から考えて見ると、諏訪町で御厄介ごやくかいになつていた時分が一番面白かつたんですわ。さつきも一人でそんな事を考出して、ぼんやりしていましたの。今夜はほんとに不思議な晩だわ。あの時分の事を思い出して、ぼんやり小石川の方を眺めている

最中、おじさんに逢うなんて、ほんとに不思議だわ。」

「なるほど小石川の方がよく見えるな。」と川島も堀外の眺望に心づいて同じように向を眺め、「あすこの、明いところが神楽阪だな。そうすると、あすこが安藤阪で、樹の茂ったところが牛天神になるわけだな。おれもあの時分には随分したい放題な真似をしたもんだな。しかし人間一生涯の中に一度でも面白いと思う事があればそれで生れたかいがあるんだ。時節が来たら諦めをつけなくっちゃいけない。」

「ほんとうね。だから、わたしも実は田舎の家へ帰ろうかと思つていますの。女給をしていても、それは別にかまわないんですけれど、つまらない事から悪く思われたり恨まれたりするのがいやですし、それにいつどんな目に遇わされるか知れないと思うと、何となくおそろしい気がしますから……。おじさん、わたし十日ばかり前に自動車からつき落されて怪我をしたんですよ。まだ、痕がついているでしょう。ね。それから腕にも痕が残っています。」と浴衣の袖をまくり上げて見せた。

「かわいそうに。ひどい目に逢つたな。恋の意恨か。」

「おじさん。男つていうものは女よりもよほど執念深いものね。わたし今度始めてそう思いましたわ。」

「思込むと、男でも女でも同じ事さ。」

「じゃ、おじさんもそんな事を考えた事があつて。先に遊んでいる時分……。」

突然土手の下から汽車の響と共に石炭の烟が向の見えないほど舞上つて来るのに、君江は川島の返事を聞く間もなく袂たもとに顔を蔽おほいながら立上つた。川島もつづいて立上り、

「そろそろ出掛けよう。差さしつかえ間まがなければ番地だけでも教えて置いてもらおうかね。」

「市ヶ谷本村町丸〇番地、亀崎ちか方ですわ。いつでも正午時分おひる、一時頃までなら家に来ます。おじさんは今どちら。」

「おれか、おれはまア……その中きまつたら知らせよう。」

公園の小径こみちは一筋ひとすじしかないのです、すぐさま新見附へ出て知らず知らず堀端の電車通へ来た。君江は市ヶ谷までは停留場一ツの道程みちのりなので、川島が電車に乗るのを見送つてから、ぶらぶら歩いて帰ろうとそのまま停留場に立留つていると、川島はどっちの方角へ行こうとするのやら、二、三度電車が停とまつても一向乗ろうとする様子もない。話も途絶えたまま、またもや並んで歩むともなく歩みを運ぶと、一歩ひとあし一歩ひとあし市ヶ谷見附が近くなつて来る。

「おじさん。もうすぐそこだから、ちよつと寄つていらつしやいよ。」と言つた。君江は

もし田舎へでも帰るようになれば、いつまた逢うかわからない人だと思うので、何となく心淋しい気もするし、またあの時分いろいろ世話になった返礼に、出来ることならむかし話でもして慰めて上げたいような気もしたのである。

「さしつかえは無いのか。」

「いやなおじさんねえ。大丈夫よ。」

「間借をしているんだろう。」

「ええ。わたし一人きり二階を借りているんですの。下のおばさんも一人きりですから、誰にも遠慮は入りません。」

「それじゃちよつとお邪魔をして行こうかね。」

「ええ。寄つていらつしやいよ。おばさんは誰か男の人が来ると、何でもない人でも、いやに気をきかして、すぐ外へ行つてしまふんですよ。あんまり気が早いで気まりのわるい事がある位ですわ。」

君江は堀端から横町へ曲る時、折好く酒屋の若いものが路端に涼んでいたのを見て、麦酒三本と蟹の罐詰とをいい付け、「おばさん。唯今。」といいながら川島を二階へ案内した。留守の中老婆が掃除をしたと見え、鏡台の鏡にも友禅の片が掛けられ、六畳の間

にはもう夜具が敷きのべてあった。川島は障子際に突立ったまま内の様子を見てびっくりしたように目ばかり光らせているので、君江は何の事とも察しがつかず、「おばさんはまだ病気だと思つているのよ。今片づけますわ。」と押入の襖ふすまをあけて枕まくらをしまいかける。川島は始めて我に返つたらしく狼狽うろたえた調子で、「君子さん。かまわずに置いてくれ。お客様にされちゃアかえつてこまる。」

「じゃ、このままにして置きましょう。御厄介になつてゐる時分、着物一つ畳んだ事がないつて能くお京さんに言われましたわね。だらしがないのはその時分から、おじさんも御承知なんですから。」と鏡台の前にあつたメリンスの座布団ざぶたんを裏返しにして薦すすめた。

おばさんが麦酒と蟹の罐詰つげものに漬物つけものを添えて黙つて梯子段はしごだんの上の板の間に置いて行く。その物音に君江は立つて座敷へ持運び、「おじさん。お着さかななら何でも御馳走しますわ。表の家が肴屋ですから窓から呼べば何でも持つて来ます。」

川島は君江のついでビールを一息にコップ一杯飲干したまま、何ともいわず、明放あけはなした窓から見える外の方へ気をくばつてゐる様子に、君江は一度懲役に行くところまで世間へ気かねるようになるものかと、気がついて見ればいよいよ気の毒になつて、

「わたし、今日起きたせいだか、暑いくせに何だか風が寒いような気がするのよ。」とそ

の実蒸暑くてならないのに、窓の障子を半ばしめてしまった。

川島は二杯目のビールに忽ち目の縁を赤くして、「世の中は何といつてもやつぱり酒と女だな。おれももう一度奮発して働いて見ようかと思うんだが、ひびたけの入った身体じやどうする事もできない。君子さんなんかはこれからだ。これから先ほんとうに世の中の味がわかって来るんだよ。田舎へ帰るなんて、先刻そう言っていたけれど、半月といられるものか。おれ見たようになって、赤い布団を見たり、一杯飲んでぼうツとすると、やつぱりむらむらとして来るからな。」

「おじさん。もうすっかり堅くなっておしまいなのね。」

君江は川島が出獄して後現在どうしているのかきいて見たいと思いつながら、あけすけには問いかねて遠廻しにこう言つて見たのである。川島は大分好い心持になつたと見え、調子もいくらか元気づいて、「無い袖は振れないから一番いいのさ。娑婆へ出てから、乞食も同然、お酒どころか飯も食えない事があつたよ。倅が丈夫でいたらどうにか力になるんだがね。おれがあつちへ行つている中に肺炎で死んでしまふし、鼻は娘と一緒に田舎へあずけてある始末だ。まだ四、五年たたなくつちや芸者に売る事もできないのさ。以前世話をした奴らに頼んだら、どうにかしてくれない事もなかるうが、それほど耻を晒して歩く

位なら——^{ひとおもい}思に死んだ方がまだしもだよ。君子さん、今夜の事はあの世へ行っても……おじさんは忘れないでお礼を言うよ。」

「あら。おじさん。そんな事……。わたしの方がいくらお世話になったか知れませんか。こうして一人でやって行けるようになったのも元はといえば、みんなおじさんのおかげじやありませんか。始め事務員になったのも、おじさんのおかげだし……。それから段々いろいろな事を覚えて……。方々の待合や何かの様子を覚えたのもやつぱりおじさんのおかげですわ。」

「はははは。今夜のビールはわるい事を教えてもらった御礼か。それなら、おじさんも遠慮せずに御馳走になろう。あの時分商売人の京子がびつくりしたくらいだからな。今はたいたしたもんだらう。」

「割合にそうでもない事よ。あの時分会社の方には随分おちかづきになったわねえ。みんなどうなすってしまったんでしよう。カッフェーでもお見かけた事がありません。」

「そうか。みんな相応に年をとっていたからな。それにあの会社もつぶれてしまったから、窮こまっているのはおればかりでもないんだらう。」

「おじさんなんか。まだまだそんなに老おいこ込む年じやないわ。六十になっても、いやになる

ほど元気な人があつてよ。」と君江はその実例に松崎博士の事を語ろうとしてそのまま黙つてしまつた。

「遊びも癖になるとつい止められなくなるもんだ。」

「おじさんなんかも、以前が以前だから、また直に癖がついてよ。」

十日ばかり君江も酒を断つていた後なので、話をしてる中に忽ち取寄せた三本のビールを空にしてしまつた。

「商売だけあつて凄くなつたな。あすこにあるのはウイスキーじゃないか。」

「アラ。病気や何かで、すっかり忘れていたわ。」と君江は棚の上に載せたままに置いていた角壇の火酒を取りおろして湯呑につぎ、「グラスがないからこれで我慢して下さい。」

「おれはもういけない。」

「じゃア、ビールか日本酒を貰いましょう。」

「もう何にもいらぬ。久振りで飲むとカラ意久地がない。帰れなくなると大変だ。」

「お帰りになれなかつたら、そこへお休みなさい。かまいません。」と君江は湯呑半分ほどのウイスキーを一口に飲干す。

「女給さんの手並みはなるほど見事だ。」

「日本酒よりかえっていいのよ。後で頭が痛くならないから。」と咽喉のどの焼けるのを潤うるおすために、飲残りのビールをまた一杯干して、大きく息いきをしながら顔の上に乱れかかる洗髪をさもじれったそうに後へとさばく様子。川島はわずか二年見ぬ間に変れば変るものだと思ふと、じつと見詰めた目をそむける暇がない。その時分にはいくら淫いんほん奔ほんだといつてもまだ肩や腰のあたりのどこやらに生きむすめ娘らしい様子が残っていたのが、今では頬ほおから頤おとがいへかけて面長おもながの横顔がすっかり垢あかぬ抜けして、肩と頸くびすじ筋とはかえってその時分より弱々しく、しなやかに見えながら、開けた浴衣の胸から坐った腿もものあたりの肉づきはあくまで豊ゆ艶たかになって、全身の姿の何処たとということなく、正業の女には見られない妖冶ようやな趣が目につくようになった。この趣たとは譬たとえば茶の湯の師匠には平生の拳動にもおのずから常人と異つたところが見え、劍客けんかくの身体には如何いかにくつろいでいる時にも隙すきがないのと同じようなものである。女の方では別に誘う気がなくても、男の心がおのずと乱れて誘い出されて来るのである。

「おじさん。わたしも今ので少し酔って来ましたわ。」と君江は横坐りに膝ひざを崩して窓の敷居かたひじに片脛かたひじをつき、その手の上に頬を支えて顔を後に、洗髪を窓外の風に吹かせた。そ

の姿を此方こなたから眺めると、既に十分酔の廻こっている川島の眼には、どうやら枕の上から畳の方へと女の髪の毛の乱れくずれる時のさまがちらついて来る。

君江は半眼なかげめをつぶつてサムライ日本何とやらと、鼻唄はなうたをうたうのを、川島はじつと聞き入りながら、突然何か決心したらしく、手酌てじやくで一杯、ぐつとウイスキーを飲み干した。

* * * * *

何やら夢を見ているような気がしていたが、君江はふと目をさますと、暑いせいかその身は肌着一枚になつて夜具の上うへに寐ねていた。ビールやウイスキーの壺びんはそのまま取りちらされてるが、二階には誰もいない。裏隣うらどなりの時計が十一時か十二時かを打続けている。ふと見ると枕まくらもとに書簡箋しよかんせんが一枚二ツ折にしてある。鏡台の曳出しひきだしに入れてある自分の用箋らしいので、横になつたままひろげて見ると、川島の書いたもので、

「何事も申上げる暇がありません。今夜僕は死場所を見付けようと歩いている途中、偶然あなたに出逢であいました。そして一時全く絶望したむかしの楽しみを繰返す事が出来ませんでした。これでもうこの世に何一つ思置く事はありません。あなたが京子に逢つてこのはな

しをする間には僕はもうこの世の人ではないでしょう。くれぐれもあなたの深切しんせつを嬉し
 いと思います。私は実際の事を白状すると、その瞬間何も知らないあなたをも一緒にあの
 世へ連れて行きたい気がした位です。男の執念はおそろしいものだと自分ながらゾツとし
 ました。ではさようなら。私はこの世の御札にあの世からあなたの身边を護衛します。そ
 して将来の幸福を祈ります。KKより。」

君江は飛起きながら「おばさんおばさん。」と夢中で呼びつづけた。

昭和六年 辛かのとひつじ 未 三月九日病中起筆至五月念二夜半纔脱初稿荷風散人

青空文庫情報

底本：「つゆのあとさき」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年3月16日改版第1刷

2010（平成22）年4月26日第28刷

底本の親本：「荷風全集 第八卷」岩波書店

1963（昭和38）年12月

入力：米田

校正：門田裕志

2012年3月28日作成

2012年9月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つゆのあとさき

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>